Historical Studies of Socialist System

ISSN 2432-8774

社会主義体制史研究

No.18（Aug. 2021）

脚本に見るドイツ映画「善き人のためのソナタ」（原題「他人の生活」）（2）批評の批評

青木國彦（東北大学名誉教授）

"Das Leben der anderen" im Filmbuch von F. H. von Donnersmarck (2) Rezension der Rezensionen

Kunihiko AOKI (Professor emer., Dr., Tohoku University)

『社会主義体制史研究』近刊予定・既刊リスト

社会主義体制史研究会
The Japan Collegium for Historical Studies of Socialist System

『社会主義体制史研究』(Historical Studies of Socialist System)

ISSN 2432-8774

Website: http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm

下記の旧 URL からも自動切換(リダイレクト)
旧 URL: http://www.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm
(違いは www の次に「2」の有無のみ)

publisher: 社会主義体制史研究会
(The Japan Collegium for Historical Studies of Socialist System)

size: A4

mail to aoki_econ3tohoku.4.5 (3=@ 4=ac 5=jp)

不定期刊(原稿があり次第発行)、文字数制限なし、無料のオンライン・ジャーナルです。

旧社会主義諸国(共産圏)の歴史(「革命」前・体制転換後を含む)と、社会主義や共産主義の思想・理論を対象に批判的検証を志しています。投稿歓迎。

表紙の写真

ドイツ映画「他人の生活」(邦題「善き人のためのソナタ」)の作者・監督ドナースマーク(Florian Henckel von Donnersmarck)。

元東独反体制派の中心人物の1人ビアマン (Wolf Biermann) はこの映画を次のように評した:

「政治的な響きは本物であり、ストーリーの筋に私は感動した。なぜだろう?多分私は理屈抜きでセンチメンタルに魅了された。というのは、多くの細部が、まるで1965年の全面的禁止と1976年の追放の間の私自身の〔職業禁止の〕経歴から引き写されたように魅惑的に見えるからだ」(ヴェルト紙上。本号2.1.1節から)。

(出所)File:Florian Henckel von Donnersmarck.jpg (CC BY-SA 3.0), in: https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Florian_Henckel_von_Donnersmarck.jpg

社会主義体制史研究* 18 号（2021 年 7 月） Historical Studies of Socialist System*, No.18, Aug. 2021

脚本に見るドイツ映画「善き人のためのソナタ」（原題「他人の生活」）(2)
批評の批評

青木國彦**

"Das Leben der anderen" im Filmbuch von F. H. von Donnersmarck (2)
Rezension der Rezensionen

Kunihiko AOKI**

目次

1. はじめに 1
2. 賛否両論 2
2.1 元東独反体制派の賛否両論 2
2.1.1 ビアマン（旧東独「国内の主要な敵」の 1 人）の絶賛 2
2.1.2 シュルツの激しい非難 5
2.2 英国ガーディアン紙上の賛否両論 5
2.2.1 フレンチ（映画評論家）の賛美と誤解 5
2.2.2 ファンダー（作家）の怒りと誤解 6
2.3 ポツダム現代史研究センター同僚間の違い 7
2.3.1 ギーゼケの激しい批判と誤解 7
2.3.2 ギーゼケの批評の批評 8
2.3.3 リンデンベルガー：無知より「はるかに良い」 10
3. ゴーリキーのレーニン追悼文：二重の読み誤り 12
4. 東独の高い自殺率は体制ゆえではない 13
4.1 グラスホフ論文 13
4.2 ヤング論文 14
補足：東独統計年鑑に公表された自殺統計と日本 15
5. 東独秘密警察（シュタジ）の非現実的な描写例 16
6. ミューエが語る体制体験と改心しないヴィースラー像 17
補足：東独の大学進学率試算 20
略語、引用文献 21
『社会主義体制史研究』近刊予定・既刊 23

1. はじめに[1]

ドナースマーク（Florian Henckel von Donnersmarck、以下作者と略記）は、ドイツ映画「善き人のためのソナタ」（以下この映画、ないし原題のように「他人の生活」と略記）の作・監督によって一躍時の人になった。

この映画は当初、2006 年 2 月のベルリン国際映画祭ノミネートが拒否される[2]など、映画界やシュタジ専門家の「かなりの疑念に直面していた」。ところが「たった 6 週間後のその初演では手放しの賞賛が起こった」（Lindenberger 2008:558）。さらに翌年にはオスカー獲得により一大旋風を巻き起こした。

だからだろうが、Gieseke（2008:585f.）によれば、ドイツの政界や「DDR〔=東独〕解明」を職業とする専門家たちにとってこの映画のヒットが「いわゆる“オスタルギー”（Ostalgie）[3]の優勢な流れから、DDR の批判的考察への転換点」として歓迎され、〔この流れの促進のため〕当時ドイツでは生徒たちが学級行事として次々と映画館へ連れられた。その際の教材として下記のパンフが使われた。

前稿（青木 2020b）でこの映画を取り上げた理由の 1 つは、ドイツ内務省管轄の公的施設である連邦政治教育センター（略称 bpb）がこの映画を「映画教育」のためのパンフシリーズ（Filmheft）に取り上げ、東独史の政治教育素材と認めた（bpb 2006）ことを遅ればせながら知り、映画の内容を検討する必要を感じたことであった（前稿:1）。

前稿ではこの映画について上映版のみではなく、そこでは大幅にカットされた脚本（Donnersmarck 2007）も見ながら、その内容を詳細に検討した。その結果、宣伝や諸批評と異なり、この映画は独裁政権下の芸術家の苦悩の描写に優れているが、シュタジ（東独秘密警察）大尉ヴィースラーに改心はなく一貫していると評した。主役ミューエも同様の評価（**6 節**）である。宣伝とは逆にその監視相手の劇作家ドライマンと女優クリスタが改心した。またシュタジの作戦の多くの描写が非現実的であり、新聞日付さえ間違えるなど時代考証もずさんであることなどを指摘した。

本稿は第 1 に、この映画への多くの批評の中から特に注目したい賛否両論を選んで批評する（**2 節**）。

批評の中で非常に意表を突いた批評はビアマンのそれであった。各批評にはなるほどと思うことも少なくなく、また諸批評の検討によって新たな知見も得た。同時に、ヴィースラーが改心するという誤解が共通することに驚いた。なぜそうなのか。何か先入観（例えば作者や配給会社の宣伝の鵜呑み）があったのかもしれない。。

第 2 に、作者ドナースマークがこの映画の着想を得たというゴーリキーのレーニン追悼文の真意を説明する。それは作者の受け止めとは異なる（**3 節**）。。

第 3 に、東独の自殺に関する歴史的事実の研究者のこの映画への強い批判を紹介する（**4 節**）。作者らは研究者からの事前の教示を反した。このことは、この映画は史実に基づくという作者や配給会社の宣伝にとって、シュタジの扱いの欠陥以上に重いダメージである。

第 4 に、この映画のシュタジ（東独秘密警察）描写のあまりに多くの非現実的描写を列挙する（**5 節**）

第 5 に、シュタジ大尉ヴィースラー役を演じたミューエへ

---

* in: http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm
** 東北大学名誉教授。Prof. emer., Dr., Tohoku University
mail to: aoki_econ3tohoku.4.5 (3=@, 4=ac, 5=jp)

1 〔〕は青木の挿入、…は青木、...は原文による省略を示す。

2 対照的に、東独の日常をコミカルかつ巧みに描いた「グッドバイ・レーニン！」（Goodbye Lenin!）は 2003 年の同映画祭で最優秀ヨーロッパ映画賞（ブルー・エンジェル賞）を受賞し、2004 年日本でも公開された。

3 オスタルギーはオスト（東）とノスタルギー（=ノスタルジー）からの造語で、東独時代へのノスタルジーを意味する。

の作者らのインタビューを紹介する(**6 節**)。彼の青少年時代や兵役、劇場の様子、身の回りの IM(シュタジの非公式協力者=密告者)などについての興味深い東独体験やこの映画の評価などが語られる。

以下に出てくるこの映画の登場人物と配役を要約した前稿の表 1 を本稿末尾に再録した(**表 4**)。

なお、この映画に関連する以下のテーマについては下記近稿を参照されたい:

・青木(2021):この映画のテーマの 1 つである東独の「職業禁止」と主な禁止対象たる「自由業」とは何か。

・青木(2021a):この映画では職業禁止の演出家が自殺するが、著名な女性演出家 F.クリーアとその夫で歌手の S.クラウチクの職業禁止との果敢な闘いと東独福音教会の支援について。

・青木(2021b):文化・芸術分野におけるシュタジの各種作戦の規定と組織体制について。

・青木(2021c):本稿 **6 節**に紹介するインタビューの中でミューエが元妻グレルマン(Jenny Gröllmann)を IM(密告者)と非難したが、死の床にあった彼女の抗議と元シュタジ幹部の衝撃の告白などにより証拠不十分としてその部分が裁判所によって発禁となった事件について。事件は東独出身文化人が抱える後遺症と苦悩、またシュタジの内情の一端を示す。

2. 賛否両論

作者はこの映画の中で、「確信を持ったシュタジのスパイ〔シュタジ大尉ヴィースラー〕が、監視すべき芸術家たちとの接触によって改心することを物語る」。

この言葉はドイツの「高級」と言われる週刊ツァイト紙上でフィンガー(Finger 2006)が記したが、同様の理解は賛否いずれの側にも共通であるし、作者や配給会社の宣伝と同じである。フィンガーは、「DDR〔東独〕についての転換後これまで最良の映画」、「独裁の支配メカニズムについて気分を滅入らせる洞察を与える映画小説」と絶賛した。

この映画を批判する側は、ヴィースラーのように改心する人間がシュタジにいたという描写はシュタジの美化だと見なした。例えば元東独反体制派シュルツ(**2.1.2 節**)や、「シュタジの国」(邦訳『監視国家』)の著者である作家ファンダー(**2.2.2 節**)である。やはりヴィースラーが改心した誤解する。

意外にも東独当局にとって三大悪人の 1 人であったビアマンはこの映画を絶賛した。彼もヴィースラーの改心と見るが、それこそが「控え目な描写」として芸術的成功をもたらしたと言う。すると彼の改心がないなら、芸術的成功も消える。だがこの映画の「芸術的」魅力の中心はドライマンやクリスタ、イェルスカなど、監視される側の描写にあった。ビアマンも「臣民の生活感情」の描写に成功したと認める(**2.1.1 節**)。

レーザー(Löser 2006)はこの映画を、「残念ながら DDR の監視体制の綿密な観察の中に低俗な要素が混合されている」と評した。その際彼は、上司グルビッツの「良心のとがめを知らない行動」〔出世主義〕や文化相ヘムプフの「堕落」がヴィースラーの「考えを最終的に一変させる」と言う。この見方は、作者や宣伝も大方の批評も、ソナタ「熱情」やドライマンらの芸術的語らいがヴィースラーを改心させると言う中では、珍しい見方である。ところが彼も、「反体制派ハンター〔ヴィースラー〕が、最悪事態からドライマンを守ることができる一種の守護天使になる」と続けた。結局のところ、やはり彼も宣伝に惑わされたのだろう。

この映画を宣伝に囚われずに見れば、ヴィースラーの説得により女優クリスタが体制への「身売り」から改心し、彼女の批判によってその恋人で劇作家のドライマンが改心して反体制行動に踏み出す。

ヴィースラーは、最後まで監視対象のドライマンを有罪にしようとすることが示すように、改心しない。彼の元来の社会主義・共産主義信奉と正義感、加えてクリスタへの恋心ゆえに、文化相・元シュタジ幹部ヘムプフと上司グルビッツの私利私欲の魔手からクリスタを救おうとしたにすぎない。

ヴィースラーはドライマンを初めて見た時から「学生たちに警告する国家の敵」のような「横柄なタイプだ」と評し、その後も彼がハウザーの逃亡芝居を仕組んで自分を騙したことやクリスタを信用していないことなどを怒った。この逃亡芝居や西独シュピーゲル誌寄稿相談の見逃し、少年の「悪い人じゃない」発言、証拠品隠しなども改心の証拠にならない。その後も、最後までドライマンを有罪にしようしたからである(青木 2020b:7,14,17,18,22-23)。

ヴィースラーのような人間、つまりに体制内教育で植え付けられた信念(実態としてはマルクスから変異したレーニン主義)に燃え、それゆえに社会主義・共産主義の敵に厳しく対処するために「党の盾と剣」(青木 2020b:4,11,補注 b)であるシュタジに入るが、一般的な道徳感情や正義感も持つ人間という人物を想定することは可能である。作者はそのような人物はシュタジ内では地下室での単純作業に左遷されるという結末を描くことによってシュタジ批判の 1 つとした。こうしたことは映画におけるシュタジ描写として効果的な可能性がある。問題は史実だとの宣伝のみである。

東独反体制派の中はマルクスの文献や建国の母ローザ・ルクセンブルクなどから読み知った将来社会像を理念として現実の体制を批判した者がいた。ヴィースラーはいわばマルクスの国家主義的変異であるレーニン主義的人物とも言える。

以下は重要と思われる幾つかの批評の紹介・批評である。

その際各批評には共通の誤解があるため、できるだけ表現はそれぞれに対応しつつも、同様の批判の繰り返しがあることをお断りしたい。

2.1 元東独反体制派の賛否両論

2.1.1 ビアマン(旧東独「国内の主要な敵」の 1 人)の絶賛

ビアマン(Wolf Biermann)のこの映画の評価は絶賛であり、後述の元東独反体制派シュルツとも、シュタジ犠牲者の取材者ファンダーとも正反対である。

東独時代の彼については野村(1986)やビーアマン(1972)に詳しいが、多少補足したい。

両独で非常に人気のあるシンガーソングライター・ビアマンは東独当局から「国内の主要な敵」3 人の一人とみなされた[4]。ビアマンはシュタジの ZOV(中央作戦事案)「抒情詩

[4] 「1974-75 年に知識人・芸術家の分野の状況が尖鋭化し」、「シュタジは当時の国内の主要な敵ビアマンら 3 人のためにわざわざ第 XX 局内に作戦グループ(OG)という特別部隊(HA XX/OG)を作った」(Walther 1996:84)。他の 2 人は東独反体制派を国際的に象徴したハーベマン(Robert Havemann)と作家ハイム(Stefan Heym)であった。ハイムはアンソロジー「ベルリン

人」(Lyriker)の、ハーベマンは OV(作戦事案)「ライツ」(Leitz)の、ハイムは OV「妨害工作者」(Diversant)の対象であった(青木 2020:6,補注 3)[5]。

ビアマンはハーベマンの 1963 年以来の盟友であり、一時的公演禁止ののち、SED(ドイツ社会主義統一党、東独支配党)中央委員会のいわゆる「皆伐総会」直前に、全面的な公演・出版禁止となった〔これはのちに言われる職業禁止に相当する〕。西独での出版は続いたが、同時に東独内でも本やレコードの「非公式な流布」があった[6]。西独でも統一ドイツでも多くの賞と連邦功労賞を受けた(Müller-Enbergs 2010:126)。

「皆伐総会」とは 1965 年 12 月 15-18 日の SED 中央委員会第 11 回会議を指す。そこでビアマンは当時 SED 政治局員であったホーネッカー(Erich Honecker)から名指しで、「"プチブル的・アナーキー的社会主義"の観点から"激しい攻撃をわが社会秩序とわが党に向け"、"敵によって DDR のいわゆる文学的反体制派の旗手にされている"、その行動は"彼に高度な〔大学〕教育を可能にした国家〔東独〕だけではなく、ファシストたちによって〔アウシュビッツで〕殺された彼の父〔ユダヤ人、共産主義者〕の生と死をも裏切っている"と批判」された(青木 2020:5、"　"内は Schubbe 1972:1078 から)。

ペリカン(Jiri Pelikan)は、「ハーベマンとビアマンが初めて、我々の世紀の国際労働運動にとっての"プラハの春"の意義」を、かつての「パリ・コンミューンの意義になぞらえた」と言った。ペリカンは元国際学連委員長、その後チェコテレビ総支配人や党中央委員、議会外交委員長などとして「プラハの春」を担い、1969 年亡命した(Jäckel 1980:49、青木 2005:95)。

1976 年 11 月東独当局は、西独ツアーのための出国を許可して帰国を禁じるという陰謀によってビアマンを追放し、ホーネッカー時代初期の文化自由化の終焉が明らかになり、内外の広範な抗議運動が巻き起こった。ミューエもその一角に参加した(**6 節**)。ビアマンの追放方法は米国政府のチャップリン追放(1952 年)に似ている。

ビアマンは、ヴェルト紙に「幽霊たちが陰から歩み出る」と題したこの映画の批評を寄せた(Biermann 2006)。その副題「若い西独人のシュタシ映画はなぜ私を驚かせるのか」が内容を示す。以下その要約(文中の「私」はビアマン):

「気高いためらい人の役割を演じる西独人がますます多くなっている」。彼らは「DDR 政権の犯罪への東独人の巻き込みをめぐる論争の際には沈黙する」。それは「カントが名付けた"自ら招いた未熟さ"への卑劣な逃亡以外の何ものでもない」。〔ところがこの映画の作者は違った。〕

「2 ヶ月前」〔2006 年 1 月〕に東ベルリンで「5 人の友人」と集まり、その席で、バートラー(Marianne Birthler)[7]が、我々に映画「他人の生活」を収録した先行 DVD を見せた。

〔この DVD は作者が初演前にシュタジ文書保管庁(BStU)ないしその長官バートラーに贈ったのだろう。〕

その映画の作者が「たぶん 2 年前に私に」その脚本を送ってくれたこと、それを読んで「いらいらさせられ」、「一切関わりを持つつもりがなかった」ことを思い出した。

というのは「この新米、西独の高貴な生まれの呼称[8]を持つこの無邪気な若い男が政治的にも芸術的にも、DDR という素材を使いこなすことは断じてできないと確信していた」からである。ところが DVD を見て、「私は唖然とし、混乱し、快く失望し、慎重に感激した」。

だが、集まりの席では「激しい論争が生じ」た。集まったうちの 2 人は、「細部の間違いだらけ」の映画であり、文化相がシュタジにこのような影響力を持つことも、いずれかの大臣にシュタジ中佐が急き立てられるこも、文化幹部の女優への横恋慕の助力にシュタジが利用されることも、シュタジの大学で若い新米将校たちが私服を着用してだらしなく坐ることも断じてなかった、と言う。

〔文化相の上位には中央委文化部長、その上に文化担当政治局員、最上位に書記長がいて、シュタジは「党の盾と剣」だからその大臣は書記長直属であった。〕

2 人は、シュタジの作戦対象は、映画の中の「体制協調的な作家」〔ドライマン〕ではなく、「本当に反体制的な作家たち」であったことも指摘した。

〔ドライマンは「体制協調的」だったと 2 人は言う。当初はそうだった。他方、諸批評は彼を当初から批判的だったと見る。どちらも彼の改心という肝心な点に言及しない。クリスタは体制迎合をやめるが、その後もふらつく。〕

上記の 2 人は、「決定は常に党指導部でなされ、国家は

物語」自主出版事件(1974-1976 年)(青木 2020a 参照)の陰の主役であった

[5] ZOV は大規模かつ複合的な OV(作戦事案)。標的の「"敵対活動"がいくつかの職務単位の担当分野に関係したか、またはそれが"規模と複合性"ゆえにいくつかの職務単位の協力を必要」とする場合に設定され、複数の「部分事案(Teilvorgäng、略称 TV)を伴う」。シュタジ本部の局または局に属さない独立の部、またはシュタジ県支部の部の指揮下に、各 TV が「種々の職務単位によって自己責任で処理された」(Engelmann 1994:22f.)。刑法等の違反容疑が対象となる(Suckut 1996:421)のは OV 一般と同じである。1976 年 1 月発効の「作戦事案の発展と処理についての方針 1/76」(詳細は青木 2021b:2.1.2 節)の第 2 実施規定(1985 年 2 月 15 日)が ZOV に関する規定を定めた(未入手)。OV の詳細は青木(2021b)参照。

[6] 彼の詩はタイプライターでカーボンコピーして回し読みされることもあった(写真など青木 2020a:17)。私は 1980 年代初めに東ベルリンの知人の家でビアマンの LP を聞いたが、その所持はウルブリヒト時代と異なり、ホーネッカー時代になってからは問題にされないとのことであった。但し「ウルブリヒト時代」のうち政治局の「青年コミュニケ」(1963 年 9 月 17 日)に始まり 1965 年 10-12 月のビートバンド弾圧と皆伐総会によって終わる期間は自由化の時代であった。その自由化を終わらせた主導者は政治局員としてのホーネッカーであるが、彼はウルブリヒトを退けて第 1 書記に就任すると、1970 年代前半にあらたな自由化を推進した(青木 2020)。

[7] 彼女は当時シュタジ文書保管庁(BStU)第 2 代長官であった。2011 年に同長官は果敢な活躍で知られた元東独反体制派ヤーン(Roland Jahn)に交代した。2021 年 6 月 17 日にシュタジ文書保管とその研究の機能は BStU から連邦公文書館に移管され、そのベルリン本部もリヒテンベルクの元シュタジ本部に移った。旧東独各県に所在した BStU 支部は分館として存続する。

バートラーは反体制派として 1980 年代後半に「平和と人権イニシアチブ」(IFM)や「連帯する教会」(Solidarische Kirche)で活動し、1989 年 11 月 4 日の東ベルリン大規模集会で演説した。1990 年からの議員活動などを経て 2000 年 10 月初代ガウク後継として BStU 長官に就任した(Müller-Enbergs 2010:131)。

[8] 作者の姓「von Donnersmarck」のうち von(フォン)は、「von Bismarck」(ビスマルク)等のように、貴族の家名を示す。

単に実施機関に過ぎなかった」ことが描かれず、「全体主義の現実を軽視している」とも批判した。

他方、「私はこの劇映画の中のそうした不正確さは副次的にすぎないと考えた者の一人であった」。

この映画の「中心物語は突飛で、本当で、美しい。とても美しく悲しいと言うべきだ。政治的な響きは本物であり、ストーリーの筋に私は感動した。しかしなぜだろう？多分私は理屈抜きでセンチメンタルに魅了された。というのは、多くの細部が、まるで 1965 年の全面的〔職業〕禁止と 1976 年の追放の間の私自身の経歴から引き写されたように魅惑的に見えるからだ」。

「不確実さと不信感は残る」。すなわち、「サウルからパウロへの転換」〔キリスト教の迫害者から使徒への転換のような改心〕を果たしたシュタジ将校がいたのか、いたとすれば体制転換後に「そうした気高い見本」が判明したはずである。

「私の友人・故フックス（Jürgen Fuchs）」がこの映画を見れば、ホーエンシェーンハウゼン拘置所は「もっとずっと厳しかった」し、「DDR の日常生活はもっと野蛮であり、もっと灰色であり、もっと劣悪だった」と、「怒りの発作を起こしただろう」。〔フックスは同拘置所 9 ヵ月留置の体験者である[9]。〕

「シュタジ大尉の驚嘆すべき変身が歴史の偽りなのか、芸術的な控え目の表現なのか分りかねる」。

しかしソルジェニーツインは「最初の小説“イワン・デニソビッチの一日”によって世界における最も強い影響を与えた」が、「すべての恐るべき大量殺人と体系的な残虐行為」をリストアップした『収容所群島』では「そうではなかった」。

前者は「スターリン時代の普通の収容所」の虐待のない「控え目な描写」であり、「まさにこの古い技巧が当時東と西で、我慢のならない真実に気付く阻止閾を克服した」。〔つまりこの映画は「この古い技巧」によって成功したと言う。〕

この映画は「人間分解のプロ、頑固な“人目につかない前線の戦闘員”自らが分解されるというストーリーである」。彼は「愛する二人を盗聴」したあと、「シュタジのセックスサービス」を利用し、「作戦的に処理されるべき知識人たちの議論と沈黙」の盗聴によって「彼らの活気によって惑わされ」、結局「最も美しい意味において破滅する。それはデフォルメの専門家のメルヘン的バリエーションである」。

〔ビアマンさえも「作戦的に処理されるべき知識人たち」（ドライマンやハウザー、イェルスカら）によってヴィースラーが改心したと言い、ドライマンらには改心を見ていない。〕

私は類似のことを「ショッセー通り 131」〔東ベルリンのビアマンの住所〕で経験した。「抒情詩人」〔ビアマンに対する ZOV の暗号名〕を「性的な武器で征服する特別任務」の女性 2 人がやって来たが、彼女らは「脱陰謀し、ミールケ〔国家保安相 Erich Mielke〕の性的闘争団から脱走した」。

この映画によって「私が想像し得なかったこと」を見ることができた〔以下の「幽霊たち」を見ることを指す〕。

「何万ページもの私のシュタジ文書」には IM の「約 215 の暗号名」（そのうちの多くを私は知っている）のほか、この映画同様に「若干のシュタジ公式職員」（すべて将校であり「高位の黒幕」）の本名も出ている。

「これらの高位の犯罪者たち」は統一ドイツでは公務員年金を受け取り「快適に」過ごし、「何十年来彼らが計画的に迫害した人々との話し合いを求めていない」。私も東独崩壊後も彼らと向き合おうしたことがなかった。

「そうした幽霊たちを、私はこの映画の中ではじめて、もちろん異化された人工の像としてであるが、生きた人間として、従ってまたその内的矛盾の中に見た。幽霊たちが陰から歩み出る。時には芸術作品は資料よりも多くの資料的証拠能力を持つ」。

「西で育った新米監督が、主役を務めた若干の名声のある俳優とともに、DDR のリアリスティックな社会風俗像を送り出し得たことへの驚きから覚めない。彼自身はそのすべてを体験したことがない！そしてそれにもかかわらずこのように若い男というものは話に加わることができる！この西独人は明らかに非常にしっかりと判断することも批判することもできるし、話に加わるだけではなく解明することさえできる。…監督は DDR 的社会化のつらい実習体験なしでもカフカ的不条理な独裁における臣民の生活感情を伝えることに成功した。ドナースマークは我々に、人の胸の中の善と悪がいかに混乱して、また複雑に混ざり合い、どうしようもなく接し合ってもつれているかを示している」。

〔「臣民の生活感情」の描写に成功したことにもビアマンは感動している。同感であるが、彼は、どの「臣民」の「生活感情」のどのような描写を成功と言うかを記していない。当然、まずドライマンとクリスタのそれだろう。繰り返し記した私見では二人の苦悩と改心こそ「生活感情」描写の核心だが、彼はそれは明示していない。描かれた「臣民」にはさらにイェルスカ、ハウザー、またマイネケ夫人やボールを持った少年とその父、「シュタジのブタ」と罵る若者たち、演出家かつ IM シュヴァルバーも入る。配転されたシュタジ下位将校とその仲間たちや曹長ウドの「生活感情」も加えられるべきかもしれない。〕

「東と西の多くの人々はシュタジや DDR 独裁についての議論にうんざりしている」し、私自身もそれについては「私の 1966 年のシュタジのバラード」〔ビーアマン 1972:182-188 所収〕や政治局風刺文書、「DDR 崩壊後の私の論争的なエッセーで十分である」と思っていた。

しかし「この新人の映画は私を、ドイツ第 2 の独裁〔=SED 独裁〕の本当に深い解明がようやく始まるのではという疑念に至らせる。もしかすると今では、独裁のみじめさすべてを自らは体験しなかった人たちがより良く解明するのかもしれない」。

〔ビアマンは率直でとらわれのない評価をする。しかしヴィースラーの「サウルからパウロへ」の改心は誤解であり、彼の盗聴相手の二人（ドライマンとクリスタ）こそが改心したことが見逃されている。二人の苦悩とその克服、改心、そしてクリスタの挫折こそがこの映画が描く「生活感情」の中心であり、クリスタの改心に自らの正義感によって介在したのがヴ

[9] フックス（1950-1999）はイェーナ大学で社会心理学を学んだ作家で 1973 年 SED に入党したが、1975 年 4 月東独「社会主義の基礎への敵対的攻撃」ゆえに除名、同年 6 月学士論文が「非常に良い」であったにもかかわらず却下、学籍抹消。ビアマンと同じくハーベマン・グループに属し、1976 年 11 月ビアマン追放直後に逮捕、9 ヵ月ホーエンシェーンハウゼン拘置所に勾留（刑法 106 条国家敵対的扇動罪）、1977 年 8 月追放。その後西ベルリンの「イェーナ村」から、同じく元イェーナの反体制派であったヤーン〔第 3 代 BStU 長官、脚注 6〕らとともに東独反体制派を支援し、東独反体制派との「連絡係」（Kontaktperson）を受け持った（Müller-Enbergs 2010: 356; 青木 2014:5）。

ィースラーであった。彼は社会主義・共産主義とその擁護のための献身という信念を捨てて「脱陰謀」したわけではないので、「ミールケの性的闘争団」の女性たちとは異なる。〕

2.1.2 シュルツの激しい非難

おそらく最も激しい非難の言葉を投げつけた 1 人は、元東独反体制派、のちにドイツ連邦議会議員になったシュルツ[10]の批評である。表題も「"他人の生活"はいかなる賞にも値しなかった」(Schulz 2007)と激しい。その論旨は:

この映画の「技術的な弱点」を1つだけ挙げる:屋根裏部屋の盗聴施設にシュタジが交代制勤務することはあり得ない。〔そのためには〕なにかのパイプ工事をする PGH(手工業協同組合)の出入りだと、住民を「強制催眠」に掛けねばならなかっただろう。

しかし「盗み聞き・覗き見会社」(Firma „Horch und Guck")〔=シュタジのあだ名〕の「大規模盗聴工作」はそんなやり方ではなかった。〔シュタジの盗聴方法は青木 2020b:脚注 14・19 参照。〕

「グッドバイ・レーニン!」などのような面白おかしい映画同様、この映画も「偉大な芸術」ではなく、DDR〔=東独〕を「死ぬほど笑い転げる」存在にしている。

〔同様に、ファンダーや作者も「グッドバイ・レーニン!」に不当な罵声を浴びせる(**2.2.2 節、2.3.3 節**)。〕

「映画の最も深刻な誤りは、〔ヴィースラーのように〕生命の危険のもとに異論派を救うようなシュタシ将校は存在しなかったし、そうした者は体制的な理由で決して存在し得なかったことにある」。

「シンドラーのリスト」や「戦場のピアニスト」が実在に基づかなければ「ひどく批判されただろう」。〔にもかかわらずこの映画がオスカーなどを受賞するのなら〕「DDR 史は、明らかに、歴史的信憑性から切り離されて自由に、かつ豊かな空想によって扱うことができる」ことになる。

「まさにミールケの機構では」、「エリート幹部の採用と訓練が完全な献身、規律と信頼性に基づいた」のであり、「冷血漢、厚顔無恥のみが勝ち進む。疑問やジョークが切り捨てにつながった。そうしたことは証明されている」、「裏切り者はその命を危険にさらした。それゆえに全く存在しなかった。ユダヤ人を救ったゲシュタポの男はいなかった。国家の敵をかばうチェキストはいなかった」。(紹介は以上。)

〔これは作者らの宣伝を鵜呑みにした非難に過ぎない。繰り返すが、ヴィースラーが恋するクリスタは「異論派」ではなく、彼は彼女の舞台復帰実現のために複雑な工作(証拠品の隠し場所自白というグルビッツの要求を満たしつつ証拠品を隠して自白を無効にする)を実行したのであって、「異論派を救うようなシュタシ将校」では全くなく、「異論派」に改心したドライマンを最後まで有罪にしようとしたシュタジ将校であった(青木 2020b:20・21 節)。

だから彼に「生命の危険」はなく、上司グルビッツが彼を郵便開封係に配置転換しただけである。しかしこの配転はグルビッツの権限外であった。シュルツはこの映画の「技術的な弱点」を 1 つだけ例示したが、このような、あり得ない設定はそれ以外にも数多い(配転問題を含め **5 節**に例示)。

多少の予備知識があれば「技術的な弱点」が多いことは明白である。しかしそうであっても、例えばドライマンの反体制への改心の描写を元反体制シュルツが評価しないのは不思議である。史実だという作者らの誇張宣伝を真に受けたた怒り狂ってその描写すら見えなかったのだろう。

作者もただ「歴史的信憑性から切り離されて自由」に描いただけではなく、文化人等についてその苦悩と対処を、シュタジについてヴィースラーの尋問講義の「非人間性」(但し **2.3.1 節**によれば 1980 年代にはそぐわない)や、グルビッツとヘムプフのような「冷血漢」的私利私欲が「勝ち進む」ことなどを描いた。

「架空の映画のヒーロー〔=ヴィースラー〕は…音楽〔善き人のソナタ〕によって改心される」とシュルツは嘲笑する。これも宣伝を信じたシュルツの誤解であり、脚本でも上映版でもヴィースラーが「音楽によって改心される」ことはない。

作者が「善き人のソナタ」によるヴィースラーの改心を描きたかったのは事実(Donnersmarck 2007:169f.)だが、それは映像化されなかった。彼は一貫して固有の信念と私利私欲を嫌う正義感を持ち続け、ドライマンが弾くこの曲を聴いて初めて正義漢(善き人)になったのではない。

但しこの曲を聴くと悪人になれないというドライマンの言葉(青木 2020b:14 節)はヴィースラーの印象に残ったかもしれない。敬愛するレーニンの言葉とされたからである。〕

2.2 英国ガーディアン紙上の賛否両論

英紙ガーディアンには 2 人の対照的な批評が載った。

2.2.1 フレンチ(映画評論家)の賛美と誤解

2007 年 4 月 15 日のガーディアン紙において映画評論家フレンチは次のように評した(French 2007):

この映画を見ると、「数分以内に秘密当局の手の中」に引き込まれる。ヴィースラーはグルビッツによってドライマンのアパートを「24 時間の監視下」に置くが、そこに同居する彼とクリスタは「国家を弱体化させる計画についてほとんど無実」であり、彼らは「単に芸術の自由および批判と民主的権利の一定の許可を求めるひたむきな社会主義者である」。

〔実際にはドライマン監視の発案者はヴィースラーで、グルビッツは文化相ヘムプフの指図で監視に同意したが、ヴィースラーに任せた。ドライマンもクリスタも当初は自由・批判・民主的権利を求めず体制協調であった。クリスタのヘムプフへの身売りを知ったドライマンは彼女にそれを止めろと言うが、クリスタから「あんたも同じ」と逆襲されて初めて「大きくやり方を変える」と改心した。クリスタもヴィースラーのファンとしての説得によって初めて身売りから改心し、こうして二人はようやく真の愛に至るが、反体制行動をするのはドライマンのみである(青木 2020b: 15-18 節)。〕

上司グルビッツは「狡猾で無原則」だが、ヴィースラーは「党の剣と盾」というシュタジの「信仰告白」を「本当に信じる正直な共産主義者」である。彼は「孤独で、本質的にまとも」であるため、「彼がしていることを疑うようになり、彼の周りの

[10] Werner Schulz。1950 年生まれ、父は職業軍人、フンボルト大学で食品技術を学び国営冷凍会社を経て同大学助手。ソ連のアフガニスタン侵攻に抗議して失職、1980-1988 年二次資源経済研究所研究員、1981 年パンコウ平和サークル創設に参加〔1982 年参加とも〕、1989 年新フォーラム創設メンバー、同代表として中央円卓会議参加、1990 年人民議会議員かつ同盟 90 報道担当、両独統一後 2005 年まで連邦議会議員、2009 年から欧州議会議員(Müller-Enbergs 2010:1195f.; Baumgarten 1996: 826f.)。彼は「十分な個人的シュタジ体験を蓄積した」(**2.3.1 節**)。

人々の愛国心を信用しなくなる」と同時に、ドライマンとクリスタの会話を聞き、「人間的同情を育む。彼はブレヒトを読む」。そこで「カップルの私生活を守るために、彼は小さな介入を開始」し、「その後彼自身の人生とキャリアを危険にさらす重大な保護方法で行動する」。こうして、「この映画は、複雑で強力な道徳的衝動を持ったサスペンスに満ちたスリラーに変化する」。

〔この記述も誤解と創造的想像の結晶である。ヴィースラーが自分のしていることを「疑う」場面はない。彼は「周りの人々」（特に上司と文化相）の「愛国心」の無さではなく私利私欲追求を軽蔑した。彼はクリスタに「人間的」愛情を抱いたが、クリスタを信じない「横柄」なドライマンには「人間的同情」さえ寄せない。だから「カップルの私生活を守るために」行動したことはない。彼は一目惚れしたクリスタを文化相の横恋慕や上司グルビッツの出世主義から守ろうとしただけである。それは愛情と正義感によるものであり、反体制行動ではなく彼の政治的信念が動揺することもなかった（青木 2020b:15・16・20・21 節）。〕

「シュタジにヴィースラーのような人間がいたのか」が問題になり、「シュタジの犠牲者の何人かはいなかったと言う」が、この映画は「そのような人物が一般的であるとは示唆することなく、その実在可能性を我々に納得させる」。

〔ここに言う「ヴィースラーのような人間」は上記のようにフレンチが誤解した改心する人間であって、想定するのは非現実的である。上記のように、むしろ改心しない個性的社会主義者ヴィースラーのほうが想定可能である。〕

「国の結束と集団安全保障の利益のために市民を互いに敵対させることによって存在する懲罰的な社会を鋭く描き出す。それは、過度の熱心さおよび個人とその自由に対する敬意の欠如がどういう結果になり得るかについての、我々自身およびと我々が選んだリーダーたちへの重要な警告として役立つ」。

〔この映画が「鋭く描き出す」のはこのような全体主義の非常に一般的なことではなく、その象徴的具体化としての芸術家・文化人・知識人の苦悩である。具体性があるからこそ「鋭く」、訴求力がある。フレンチがそこに注目しないのは、この映画で最も重要なドライマンとクリスタの改心に気付かず、ヴィースラーが改心したかのように誤解したからである。〕

2.2.2 ファンダー（作家）の怒りと誤解

Funder（2003、邦訳『監視国家』）の著者であるファンダーは怒りを露わにこの映画を批判した（Funder 2007）：

この映画は「素晴らしい」し、「美しい」が、「そのストーリーは GDR〔=東独〕の独裁下では起こり得なかった（し、決して起こらなかった）空想物語である」。

両独統一後ドライマンは新しい小説を「“感謝を込めて”元シュタジの男〔=ヴィースラー〕に捧げた」が、「そういうことは耐えがたい。シュタジの男がその犠牲者を救おうとすることはなかった。不可能だったからである」。

〔これも誤解に基づく非難である。ヴィースラーへの献辞はドライマンのシュピーゲル誌寄稿の証拠品のタイプライターを隠したことへの感謝だが、ヴィースラーがドライマンを「救おう」しなかったどころか、有罪にするつもりだったことは映画の中で明らかである。彼の証拠品隠しはクリスタの自白を無効にし、自分が彼女に自白させたことを償うためであった。自白させたのは彼女の舞台復帰実現のためにやむを得なかったからである（青木 2020b:20-21 節）。

そうした事情を知らずにドライマンが彼に感謝した。つまり誤解に基づく感謝であった。この映画をヴィースラーの改心物語と思い込むファンダーは、そのことを理解できなかったか、無視した。ファンダーの以下の改心不可能論も改心しないヴィースラーには的外れである。〕

不可能だったのは、実際のシュタジは「徹底的な内部監視（テロ）と任務の分割」をし、「すべてがチェックされ、クロスチェックされた」からである。任務の分割ゆえに「いくらかの元シュタジの男たち」は、命令に従っているだけの「小さな歯車」であって「多くの危害を加えることはできなかった」と考えている。「おそらくこれが部分的には、ヴィースラーのような悔い改めがまれな理由である。私の考えでは、加害者の改心から救いがもたらされることを当てにすることは、官僚化された邪悪の本質を誤解することである」。

統一ドイツでチラシのポスティングという「天罰」を受けたヴィースラーと異なり、元シュタジは「概して〔彼らが〕抑圧した人々よりも新しいドイツではるかにうまくやっている」。例えば「多くがその重要な専門知識を熱望する警備会社や私立探偵社から飛び付かれ」、また管理能力を活かして「事業を始めた」。

作者は、「誰かがどのように振る舞ったのかを探るような実話を語りたかったわけではない。この映画は実際に起こったことの明細書というよりも、人間性への信頼の基本的な表現である」と言った。しかし、「シュタジが「人間性への信頼の基本的な表現」のためのいかなる材料も提供していないことこそ恐ろしい真実である。良心と勇気の表現のためには、抵抗者に目を向けることが必要である」。

この「シュタジの 1 人の男の改心についての映画」は、「加害者の赦免のための不適切な口実」になり得る。

〔こうしてファンダーは、ドライマンとクリスタ、イェルスカの独裁下の苦悩や、ドライマンとハウザーら「抵抗者」の場面、元シュタジ幹部ヘムプフのロシア向けビジネス転身の成功などの主要場面すべてがなかったかのように記した。〕

クナーベ（Hubertus Knabe、当時ホーエンシェーンハウゼン拘置所記念館館長）は「“シュタジの男を英雄にする”ことに反対し」、監督がシンドラーのリストを例にこの映画を正当化したことに対して「“シンドラーはいたが、ヴィースラーはいなかった”と言う」。彼が言うように。元シュタジの「一種の忍び寄る名誉回復が進行中」の今、この映画は「彼らの思うつぼになる」。

「監督の声明」には、この映画は「間違った道にどれほど陥ったとしても正しいことをするという人間の能力についての人間的ドラマ」だとある。しかし全体主義的抑圧体制に対して「いかに我々は脆弱であるか」を認識すべきであり、加害者を「体制に捕らえられた善意の人々（すなわち一種の犠牲者）」と見なすなら被害者が置き去りにされる。

〔この批判には一理あるが、そもそも「監督の声明」がこの映画の実際に合致してないことのほうが問題である。〕

いま元シュタジたちが「ブーギーマン〔悪い子供をさらっていく小鬼〕として歴史に残ることのないように猛烈に戦っている」だけではなく、「多くのドイツ人自身が、これの冷酷な非人道性、彼らの国土における第 2 の独裁を認めることに気まずさを深く感じている」。

〔ヴィースラーの改心という作者の宣伝を真に受けたスト

ーリーの誤解は以下でも続く。〕

ドライマンとクリスタの「会話、電話、性行為」の盗聴により、「次第に芸術のより高い価値」や「より広い考えに触れて、ヴィースラーの〔シュタジとしての〕盲目的な服従が弱まっていく。彼は女優に恋し、彼は改心」して、「破壊工作からカップルを救おうとする」。

〔実際には盗聴とビデオ監視によってヴィースラーはクリスタのヘムプフへの身売りを知り、これをドライマンに見せつけ、二人の溝を作る。しかし愛するクリスタへのヴィースラーの説得によって身売りを止めたクリスタはドライマンと熱烈に抱擁し、彼はこっそりそのベッドを見に行く(青木 2020b:11・12・13 節)。その後の展開にも「芸術のより高い価値」や「より広い考え」に触れて改心する場面はない。

二人の影響によって彼のシュタジへの「盲目的な服従が弱まっていく」のではなく、彼は元来の信念と「頑固な」律儀な性格によって、映画の最初から上司グルビッツの出世主義を快く思わず、すでに劇場場面(2020b:5 節)で同僚アンディ支援のためにグルビッツに逆らってドライマン監視を頑固に主張した。大臣ヘムプフへのクリスタの枕営業のグルビッツによる黙認にも不服であった(同前:9・11・12 節)。

彼はクリスタに恋したが、それによって、社会主義・共産主義やそのための国家と党の擁護の義務という信念から改心してはいない。グルビッツやヘムプフへの反感は私利私欲の否定であって、体制の否定ではない。改心後のドライマンと異なり、彼女は改心後も反体制に転じないどころか、ドライマンの寄稿を証言したのだから、ヴィースラーが彼女の舞台復帰を実現しようとすることも反体制では全くない。

ヴィースラーは「カップルを救おう」としたことはなく、ドライマンを有罪にし、恋するクリスタの舞台復帰を実現しようとした。ドライマンが救われたのはクリスタの思いがけない自殺の結果にすぎない。

この映画にはシュタジについての非現実性や雑な時代考証など多くの欠点があるが、繰り返したように、優れた点も多く、特に芸術術家とジャーナリストの独裁下の生き方、苦悩、闘い、挫折を巧みに描き、またシュタジの家族分解をほのめかす尋問方法や眠らせない連続尋問を強調した。

ファンダーは「グッドバイ・レーニン!」を「低俗な映画」であり、「シュタジの役割を最小限にした」と切り捨てる。しかし、それは東独における独裁の教義と日常生活をユーモアたっぷりに知らしめた優れた映画である。すべての東独関連映画がシュタジを取り上げなければならないわけではなく、笑いが低俗とも限らない。彼女の見方は全くの誤解に加えてあまりに狭隘である。〕

2.3 ポツダム現代史研究センター同僚間の違い

当時ポツダム現代史研究センター同僚で、同じ学術誌の特集に寄稿したギーゼケ(Jens Gieseke)とリンデンベルガー(Thomas Lindenberger)は異なる評価をした。

2.3.1 ギーゼケの激しい批判と誤解

ギーゼケは 1964 年生まれで、この映画公開と同時期に改訂増補された Gieseke(2006)の著者紹介には、「シュタジ文書の最も該博な専門家」とある。1993 年から BStU 研究員、2008 年以後ポツダム現代史研究センターのプロジェクト責任者である(Gieseke 2000, 2011; de.wikipedia)。

この映画に対するシュタジ専門家としての彼の批評 Gieseke(2008)の要旨は以下のとおりである(彼の批評についての私見は次節):

作者はこの映画を「広範な事実の上に物語を構築した」と言い、「東独の歴史的イメージに非常に大きな影響を与えた」。しかしこの映画は「歴史的信憑性のテストに合格していない」し、事実よりも、「過去を受け入れるという最近の議論についてより多く語る」映画である。

東独史の他の映画、例えばドキュメンタリー「ある官庁の日常。国家保安省」、コメディー「ゾンネンアレー」や「グッドバイ・レーニン!」に比べて、「特に」俳優の熱演によって「芸術的に非常に良い映画との印象」だが、「シュタジ解明」については何ら「傑出した」映画ではない。

「信憑性」を問うのは、この映画が「歴史的素材」を扱ったからだけではなく、作者のすべてのインタビューを含め「この映画のためのプロモーション・キャンペーン全体」が、「集中的な歴史的研究と、専門家や元シュタジ将校、元異論派との会話を強調した」からでもある。

その上作者は「完成した映画を即座に効果的に、DDR 解明の選ばれた諸オピニオンリーダーによっても正確なものと認定させた」と言って、彼はビアマン(**2.1.1 節**に紹介)を名指しした。この映画は、「公開シュタジ論争の映画という手段による継続」であり、「また初めての正確なシュタジ映画」だと宣伝された。

宣伝キャンペーンに際して作者らは、映画「没落」(Der Untergang)〔2004 年、ヒトラー政権の最後の 12 日間を描いた〕の監督ヒルシュビーゲル(Oliver Hirschbiegel)と脚本のアイヒンガー(Bernd Eichinger)の成功に学んだ。

「もちろん全体の趣旨にすべての細部が合致しなければならないわけではない」が、この映画の「マーケッティング戦略」は「写実的な模写」の強調にあるのだから、「歴史的信憑性のテスト」が必要であり、その主な結果は:

●「臭いサンプル」〔映画の場面は青木 2020b:6〕

「今日のシュタジ議論の一連の象徴的な対象」の 1 つである「臭いの布」も描かれたが、しかし「この臭いサンプルの実際の意味は今日まで不明である」。また「他の警察機関もこの犯罪捜査学的方法を利用している」。

●「連続的な長時間尋問」〔場面は青木 2020b:3 節〕

「多くの時間と日数に渡る睡眠を許さない連続的な長時間尋問」〔映画では「40 時間尋問」ないし「48 時間尋問」〕は「1950 年代と 1960 年代の標準的な方法」であった。

それは「1980 年代にはもはや通例ではな」く、「多くの他の心理的トリックと並んで、とりわけ囚人の完全な孤立化と尋問官を唯一の社会的接触とすること」を重視した。〔このことは映画の中でハウザーがドライマンに 48 時間尋問とともに「孤独」の怖さも指摘した(青木 2020b:16)。〕

大尉ヴィースラーはシュタジ大学講義において容疑者の有罪・無罪を知る最善の方法として長時間の連続尋問を強調したが、これは「シュタジのやり方の誤認」である。なぜならシュタジは「逮捕し尋問した時点」ですでに「有罪だととっくに確信していた」からである。シュタジの尋問目的は「有罪か無罪か」でばなく、「同調者を不利にすること」であった。

●シュタジお抱え売春婦〔場面は青木 2020b:7・13 節〕

「長時間尋問」よりも「もっと奇妙なのは MfS〔シュタジ〕職員に個人的にサービスする売春婦の登場である」。

実際にそうだったという売春婦から話しを聞いたと作者は言う〔典拠の URL はすでに無効〕。その売春婦が実際にそう言ったとすれば、それは「明らかに巨大な嘘八百」である。

シュタジには「心底小市民的な家族像」があり、「シュタジ専属のセックスサービスの席は全くなかった」。売春婦の利用は「専ら、例えば西のビジネスマンから情報を得るか、または恐喝できるようにするため」であった。

●こうした奇妙な内容の「リストはいくらでも長くすることができる」。例えば「屋根裏部屋での監視機材の設置、シュタジ大学でだらしなく坐る学生（と女子学生！）、その他多数」。

●「悲しき大尉ヴィースラー」

「もっとおかしい」ことは、シュタジの写実的描写と「大尉ヴィースラーの道徳的物語とのコンビネーション」である。

「強硬路線」だった彼が、「同僚や上司たちの冷笑主義に幻滅させられ」、また彼が監視する「芸術家ペアの知的かつ感情的な魅力に魅せられて」、「反体制諸活動のひそかな支援者」、「彼らの“敵対活動”の一種のひそかな守護聖人」に変化する。こうして彼は「あれこれ思い悩む知的本質を持った強硬路線の男」として「美化されている」。

しかしシュタジの実際の中にそうした「範例」は存在しなかった。もし存在したとしても、彼のような人物は「シュタジの隊列で、ましてや著名な体制批判者に対する闘争の最前線では、決して 20 年の長きに渡って自制することはできなかっただろう」。「本当のシュタジ将校は卑屈さと反知性主義、権力意識の非常に陳腐な混合」であり、「ドイツ的なお上国家の警察官伝統がスターリン主義の無思慮さと一体化した」存在であった。

「シュタジ将校たちは権威主義的性格であって、知識人や芸術家のつかみどころのないボヘミアン生活を彼らの秩序正しい世界の脅威と捉えたのであり、賛嘆して眺めたことは確実に一度もなかった。「その警察官〔ヴィースラー〕が彼〔ドライマン〕をうらやむというのは芸術家〔ドナースマーク〕の幻想である」。

ヴィースラーは「硬骨漢」ではあるが、「私生活では惨めで意気消沈した状況」、「孤独で、すべてのメンバーから見捨てられ、空虚な住まい」で生活し、「彼の周辺の共産主義信念の欠如が彼に深い精神的ショックを与えている」。

このような描写は、作者が「根本においてシュタジ職員の生活世界を理解していない」ことを示している。

●ゴーリキーのレーニン

作者はある時ゴーリキーによって、レーニンがベートーベンの熱情ソナタを「しばしば聴くことはできない」、革命遂行のため「“容赦なくぶちのめさねばならない”人々の頭を撫でようとするから」だと語ったことを知ったと言う。

ゴーリキーは「レーニンのような“誠実な指導者”の職務」を「思いやりをもって“非人間的に困難な”ものとして記述」した。「多くの人々が〔その〕犠牲になった」ためである。

〔ここにあるゴーリキーからの引用には原文とは多少異なる場合があるが、そのままにする。ゴーリキーの原文とその解釈は **3 節**参照。〕

ところが作者は、「レーニンが熱情を聴くことを余儀なくされれば、彼は別の道を歩んだだろうに」という「逆の推論を引き出す」。〔つまり「熱情」を聴けば、「非人間的」行為をしない善き人に変わる、という「逆の推論」。〕

作者は、〔この推論に基づいて「熱情」（映画の中では「善き人のソナタ」）を聴かせることによって〕「彼の悲しきヴィースラーを善き人の道へ引き戻せた」。

作者は、〔ロシア革命を描いた〕「ドクトル・ジバゴ」や〔ベトナム戦争を描いた〕「ディア・ハンター」を例に、「私が実話よりもなんらかの形でより真実であるフィクション的物語を創造することができるということを知った」と自負する〔典拠はこの映画の Press booklet 9 だが、未見〕。

だが「1980 年のソ連のアフガニスタン侵攻に対する抗議以来十分な個人的シュタジ体験を蓄積した元 DDR 反体制派シュルツ」は、「この捏造性と背後にある、「善、真、美」の力を信じたいという西独監督の欲求を確認している」。〔シュルツによる批判は **2.1.2 節**。〕

●「その他のシュタジ活動様式からの更なるひどい逸脱」

ヴィースラーはシュタジの「諸機能全体」、すなわち「尋問者、訓練者、盗聴専門家、監視者[11]、IM 指導将校等々」を一人で引き受ける。しかし「これらは現実には多くの人物や部門の間で分業された」。

〔このうち「IM 指導将校」は当たらない。クリスタが誤解して尋問役のヴィースラーに「あなたが私の“指導将校”なのね」と言うだけである（青木 2020b:22）。〕

このあとギーゼケはドイツにおけるこの映画をめぐる論争の意味と背景を考察する。

2.3.2 ギーゼケの批評の批評

ギーゼケはシュタジ研究者として幾つも重要点を指摘した。同時に上記以外にも、誤解や見過ごしなどがある。

●ヴィースラーが、「芸術家ペアの知的かつ感情的な魅力に魅せられて」、「彼らの“敵対活動”の一種のひそかな守護聖人」に改心したという誤解

上記の諸批評と同じ誤解である。彼は、作者らの宣伝内容を批判しつつも、ヴィースラー改心についてはそれを真に受けた。この種の誤解にはすでに触れたが、関連する論点としてクリスタへの彼の対応を付け加えたい。

ヴィースラーは初めて舞台で見たクリスタに一目惚れした（青木 2020b:6 節）。その後もこの映画は、彼女らのベッドのシーツを頬に当てる様子（同前:13 節）や彼女に身売りをやめさせる説得（同前:15 節）、ドライマンが彼女を信用していないことに怒る様子（同前:17 節）、彼女の舞台復帰を促す場面（同前:20 節）、彼女の自殺時に抱きかかえる様子（同前:21 節）など、再三彼の彼女への愛情を描いた。

彼女はヘムプフへの身売りをやめただけで、反体制のつもりは全くない。映画ではヘムプフが復讐として彼女を薬物乱用でシュタジに逮捕させる（同前:19 節）が、それは本来シュタジが動く案件ではない。拘留の際の尋問の中で彼女はグルビッツにドライマンのシュピーゲル誌寄稿を証言し、反体制ではないだけではなくシュタジ協力者となった。

ヴィースラーは、「あなたの〔グルビッツへの〕証言と我々がすでに彼〔ドライマン〕の住居で見つけた不利な材料」だけで彼は有罪であり、「どのみち刑務所」行きなのだから、寄稿の証拠品のタイプライターの隠し場所を自白して「自分を救いなさい」、「あなたの観客のことを考えなさい」と説得する。すると、彼女は体制内での舞台復帰の道を選び、

[11] 原文は Observant（厳格な規則の修道士）だが、Observator の誤記だろう。

証拠品の隠し場所を自白する(同前:20 節)。彼女の優復帰を願う説得は彼の愛情ゆえであり、彼女は反体制ではないのだから反体制支援ではないどころか、彼は“敵対活動”をしたドライマンについてはあくまで有罪にしようとする。

この証拠品をヴィースラー自ら隠す(同前:21 節)のは、彼女の隠し場所自白を無効にして彼女のためにドライマンに隠し場所自白が知られないようにするとともに、自白させたことへの彼の償いでもある。それはクリスタへの愛情ゆえの行動であり“敵対活動”支援はどこにもない。彼が守護聖人になろうとしたのはカップルではなくクリスタのみである。

結果的にドライマンが救われるが、それはヴィースラーが証拠品を隠した結果ではなく、クリスタの自殺よって寄稿の証言者が消えた結果である。

なぜこうした映画展開をギーゼケに限らずどの批評家も見ないのか、また作者自身も顧みないのか不思議である。

ドライマンについてヴィースラーは、初めて見た時に「あれはまさに、私が学生たちに警告する横柄なタイプだ」だと言う(同前:5 節)。彼は学生たちに「わが国家の敵は横柄である」と警告した(同前:3 節)。その時点ではドライマンはクリスタが言うように体制協調であるが、彼にヴィースラーは「国家の敵」の臭いを感じたという設定である。その後改心して反体制(「国家の敵」)を決意したドライマンは逃亡芝居で彼を騙し芝居の成功にシュタジを大声で嘲笑し(同前:16 節)、シュピーゲル誌寄稿を断行した(同前:17・18 節)ため、彼はクリスタのグルビッツへの証言(同前:19 節)を利用してでも、ドライマンを有罪にするつもりであった(同前:20 節)。

だから彼にとっては、ドライマンとクリスタは同棲カップルではあっても、評価も対処方針も全く別の対象であった。ましてや彼自身がドライマンに同調する「国家の敵」、あるいはその支援者になろうとすることはどこにも描かれていない。

だからまた、愛し合う「ペア」はいても、ギーゼケの言う「芸術家ペア」の一体的な「知的かつ感情的な魅力」はどこにもない。クリスタは反体制に転じないのみならず、ドライマンのシュピーゲル誌寄稿を証言するのだから、「彼らの“敵対活動”」ではなく「彼の“敵対活動”」しか存在しない。

だから監視作戦の中でヴィースラーは、ドライマン監視とクリスタ守護という両立困難な課題に直面した。

例えばドライマンとシュピーゲル誌編集者の寄稿相談を急襲すれば、ドライマン監視は逮捕という成功裏に終わるが、同誌編集委員来訪の場に居合わせたクリスタも巻き込む結果となって、ヴィースラーには耐えられなかったはずである。ちなみに、ハウザーの逃亡芝居の検問所への通報中断はグルビッツに、盗聴発覚を恐れたと言い訳可能である。

彼は、クリスタを救うが、ドライマン摘発という任務を果たすつもりであった。しかし彼女の自殺という彼には想定外の悲痛な出来事が発生する。彼女は死に際にヴィースラーに、「私がしたこと〔自白〕を償うことがもはやできない」と言う。これに対して彼は、「償うことは何もない。分かる?何もない…私がタ…」と「懸命にささやく」(ト書き)(青木 2020b:24)。「私がタ…」は、「私がタイプライターは隠した」と言おうとしたのだが、その途中でドライマンが駆けつけたため、ヴィースラーが離れて中断した。

こうしてグルビッツへの証言の証人と寄稿の証拠品の消失となり(「不利な材料」だけは残った)、ドライマンだけが救われるという彼にとってはやりきれない結末となった。

もしクリスタが自殺しなければ、ドライマンは逮捕され、ホーエンシェーンハウゼン拘置所を経てバウツェン刑務所行きであっただろう。だが、彼女の自殺なしでは当然映画としての魅力が失われ、オスカーもなかっただろう。

彼女の逮捕から自殺に到るテンポの速い波乱の場面におけるグルビッツ対クリスタ対ヴィースラー、そしてヴィースラー対クリスタ対ドライマンの絡みは、ドライマンとクリスタの苦悩とその克服とともにこの映画の描写の特長である。

●レーニンはその時熱情ソナタを聴いていた

「レーニンが熱情を聴くことを余儀なくされれば、彼は別の道を歩んだだろうに」という作者の「逆の推論」をギーゼケは批判した。レーニンは熱情ソナタを聴いた場で、しゴーリキーが伝えた発言をしたのだから、革命遂行の最中に彼は熱情を聴いたし、聴いても革命のために悪人であり続けた。作者もギーゼケもそのことに気付かなかった。だから「逆の推論」はゴーリキーの文章には成り立たず、作者が誤解したゴーリキーにのみ成り立つ(詳しくは **3 節**)。

●「熱情」か「音楽」一般か

ギーゼケも作者も、レーニンが「しばしば聴くことができない」と言った対象を「熱情」だ言うが、そうではなく、ゴーリキーによれば「音楽」一般である。だからレーニンは熱情ソナタ(この映画の中では「善き人のソナタ」)だけに特有の力を感じたわけではない。また音楽を聴くことができないのは革命児でも「しばしば」であって常にではない(詳しくは **3 節**)。

●「メンバーから見捨てられ」、「孤独」だったか

確かにヴィースラーは、自分なりの道徳感を強く持ち、人付き合いが良いわけではなく、近い将来の共産主義を確信する変人[12]でもあった。

しかし、上映版では該当場面がカットされたが、脚本では彼は同僚アンディと良い関係にある。脚本からは、彼がドライマンの監視を言い出すのはグルビッツによってハウザー監視失敗を譴責されているアンディを支援のためだと推測される。ハウザーがドライマンと親しいことを彼が知ってから監視を言い出すからである。また盗聴器設置の際の「伍長マイアー」も初めて接したヴィースラーに「感心する」。盗聴の分担者ウドもドライマンらの建国記念脚本芝居の場面以前は彼を尊敬している(青木 2020b:4・5・17 節)。

彼は上司グルビッツとも、その出世主義を嫌いつつも、一応友人関係という設定であった。ホーネッカーを風刺して配転された少尉シュティグラーに同情し、配転先での関係も良好であった。

●「同僚や上司たちの冷笑主義」

「冷笑主義」に該当する「同僚」は誰か。思い当たらない。登場する「上司たち」は、直属上司グルビッツと、グルビッツを子分のように扱おうとする文化相・元シュタジ幹部ヘムプフ、電話でグルビッツを叱咤する国家保安相ミールケである。3 人とも出世や権力行使に狂奔する幹部として描かれており、「冷笑主義」には見えない。

●ヴィースラーの「あれこれ思い悩む知的本質」と正義感

ヴィースラーの「知的本質」は社会主義・共産主義の理

[12] 東独政権の理論書(SED 1969)は「共産主義」を相対化したが、同書をソ連の反発で引っ込めた。しかし共産主義建設を政策化せず、一部には共産主義願望からの現体制批判もあった。

念の確信、その裏返しとしての「社会主義の敵」への敵意以外に考えられない。このことについて彼が「思い悩む」ことは映画の最初から最後まで全くない。上司グルビッツがその点で落第であっても、ヴィースラーはそれをただ軽蔑するだけで、悩むことはない。

彼が「思い悩む」、ないしは苦慮したのは、グルビッツが非難する同僚アンディのこと（友情による）と、とりわけクリスタのこと（愛情とヘムプフへの怒りによる）である。

いずれも「知的本質」というよりも、一般的な道徳観、愛情、正義感の類いである。正義感はグルビッツの出世主義やヘムプフの権力を笠に着る強欲さへの反発ほかに示された。

ヴィースラーについてのこうした描写は、「社会主義の敵」への苛烈さと対照されて、映画の魅力を引き立てた。

実際にはこういうシュタジを見つけ得ないかもしれないが、存在可能性は少なくとも抽象的にはある。だから映画のストーリー展開に活用することは許されるが、作者のようにそれを史実や写実と言うと、事例を示せということになってしまう。

●独裁下の芸術家・知識人の苦悩

ギーゼケも、他の多くの批評と同様に、この映画が描いた東独の文化人やジャーナリストの姿に全く触れない。イェルスカの苦悩の末の自殺、ハウザーの「抜け目のない」反抗（青木 2020b:4・10・14 など）はもちろん、主要登場人物たるドライマンとクリスタの苦悩と改心も全く取り上げない。

ドライマンとクリスタの苦悩と改心の場面のみ簡単に振り返っておきたい（青木 2020b:12・16-21 節）。

ヴィースラーがクリスタのヘムプフへの身売りを見つけ、ドアベルを操作してその事実をドライマンに見せつけた。そこでドライマンが身売りをやめさせようとするが、クリスタから、あんたも同じようなもの（体制同調者）と批判され、ドライマンが改心して、イェルスカ追悼のためにシュピーゲル誌への寄稿[13]を決意し決行する。

ドライマンを振り切ってヘムプフの待つホテルへ行こうとしたクリスタはヴィースラーの「観客」としての説得により身売りをやめ、ドライマンのもとに戻り、熱烈に抱き合う。しかし怒ったヘムプフが彼女を薬物乱用でグルビッツに逮捕させる。すると彼女の体制おもねりが再開し寄稿は誰か、証拠品の隠し場所はどこかの 2 つの自白をしてしまい、償いに自殺する。彼女を舞台復帰させるために隠し場所自白に関わったヴィースラーは彼女が償う必要がないように証拠品隠すが、突然の自殺を止めることができず、意図と逆にドライマンのみ救ってしまう。

クリスタ改心に際してシュタジ大尉が支えになるということは史実に基づかないとしても、ギーゼケの言うシュタジの倫理観に合致しており、作劇法としても効果的である。問題はやはり史実に基づくかのような作者らの宣伝だけである。

こうしたストーリーには「搾取映画」との批判もある（**2.3.3 節**）が、史実でなくても独裁下の芸術家の苦悩を巧みに写実的に描いた。このことにギーゼケその他の批評家たちが注目しないのは不思議である。このストーリーにおいてはィースラーは脇役である。

但し作者がクリスタを常に男性に頼りおもねるとしか描かないことに批判がある（例えば **2.3.3 節**）のは当然である。

2.3.3 リンデンベルガー：無知より「はるかに良い」

当時（2008 年）ポツダム現代史研究センターでギーゼケの同僚であったリンデンベルガー（Lindenberger 2008）のこの映画の批評はギーゼケと異なる。彼は現在ドレスデンのハンナ・アーレント全体主義研究所（HAIT）所長である。その批評の後半（筋立て詳論）は省略し、前半を紹介する：

この映画は「芸術的にも商業的にも exploitation film（搾取映画）の古典的なケースと見られる可能性がある」。なぜなら「愛、罪悪、贖いに関する感動的なドラマ」の中で「古い考えの男らしさと和解へのおなじみのドイツ的憧れ」が展開されるからである。

〔「搾取映画」は金儲けのための B 級映画を意味する。「古い考えの男らしさ」には古い考えの「女らしさ」が伴い、クリスタは男に頼り、媚びる存在として描かれた。「和解への…憧れ」は、ドライマンとヴィースラーの関係が敵対（盗聴・監視）から「和解」に変化したことを指す。前者のドイツ統一後の著書に後者への感謝の献辞があることが両者の和解だと見なされた。それは下記のように誤解である。〕

この映画は 2006 年 3 月から翌年 5 月までに「210 万人以上」を動員した。但し「最初の 18 ヵ月に 600 万人以上」を動員した「グッドバイ・レーニン！」ほどの大ヒットではない。

この映画はオスカーを得てドイツ映画の評価を高め、また「近年ある程度停滞していた GDR〔東独〕の過去についての議論を活気づけ、再開すること」に寄与した。

シュタジ研究者や映画人による「批判的な批評」は「信憑性の問題」や「物語の筋」の問題点を指摘するが、こうした寄与を「軽視」してはならない。

この映画への映画人の批判は、「ベルリン国際映画祭（2006 年 2 月）でのノミネート拒否に現れた」〔「グッドバイ・レーニン！」とは対照的（脚注 2）〕。しかし「たった 6 週間後のその初演では手放しの賞賛」が起こり、「ドイツの文化的・政治的なエスタブリッシュメントから称賛」が寄せられた。

「監督と配給会社はこの映画を本当に“正確な”ものとして宣伝した」が、Gieseke（2008）にあるように、「いくつかの不正確な要素はどの専門家にも明らかであった」。

しかし「正確さの重要な要素が残っており」、東独の「歴史に詳しくない観客」（西独地域の大部分や東独地域の若い人、外国人）が「SED 国家とその監視システム」についての「一般的観念を得ることを可能にする」。それは「全く知らないよりもはるかに良いことである」。これが連邦政治教育センターがこの映画を利用した政治教育教材（bpb 2006）を作成した理由でもある[14]。

制作側はこの映画の歴史的「信憑性」について「細部」の「正確さ」に加えて、物語の「シリアス」さを宣伝するだけではなく、対照的に「グッドバイ・レーニン！」と「ゾンネンアレー」〔東ベルリンの高校生のコメディー描写（1999 年）〕を「ただ単に喜劇的、風刺的であり、シリアスではない」と、「全くフェアでないやり方で中傷した」。

この「うまい手」によって「政界のエリート」の「一致した称賛」を得た。というのは、「遡及的当てこすり」にすぎないが、

---

[13] それはベルク（Hermann von Berg）らの、ドイツ民主的共産主義者同盟）の名で、一党独裁と腐敗・職権乱用やソ連の「領土強盗」などを糾弾したいわゆるシュピーゲル宣言を想起させる（青木 2018:62-65 参照）。

[14] 同センターは「グッドバイ・レーニン！」についても同様の教材（Filmheft）を 2003 年に作成した（Lindenberger 2008:559）。

「グッドバイ・レーニン!」などには「“オスタルギー”〔東独ノスタルジー〕を体現した」という見方があったからである。

〔「ゾンネンアレー」は見ていないが、「グッドバイ・レーニン!」は明らかに痛烈な風刺による体制批判である。しかし旧東独の日常がリアルに描かれるからオスタルギーを刺激された観客もあり得た。「政界のエリート」はそれを感じ取ったのだろう。〕

こうしてこの映画は、「多くの点で歴史的正確さを欠いている」にもかかわらず「“一般国民”が何年も熱望していたと主張される SED 国家抑圧のリアリスティックな映像として受け入れられた」という「パラドックスの達成を可能にした」。

すでに政治家・文芸評論家・著名な専門家(歴史家・映画人を除く)の間に、この映画について「ドイツ史の陰鬱な章についての偉大な映画だという圧倒的に幅広いコンセンサスがある」。だから「細部のレベルのみで正確・不正確の問題を議論する」よりも、「この映画のストーリーの肯定的な貢献に目を向けねばならない」。

〔要するに、この映画は不正確で、宣伝もフェアでないが、「政界のエリート」などの「一致した称賛」を得たという貢献を評価せよという奇妙な褒め方である。その結果彼は、1989 年以前の「国家抑圧」の「不正確」な描写を重要と言えず、以下のように、「1989 年以後のセット」(つまりシュタジ解体後)がこの映画の「肯定的な貢献」として「重要」だと言う。〕

この映画の「肯定的な貢献」を知るには、「1989 年以後のセットが重要である」。そこでは「シュタジのテロの犠牲者〔ドライマン〕と加害者〔ヴィースラー〕が最後の機会に思いやりのある方法で互いと通じ合う」。この映画の「物語は和解への憧れを中心に構築されている」。

「もともと和解不可能性によって特徴付けられた彼らの関係における根本的な転換を可能にする」ための「基本的な筋立て」、それが「異論派同調者に改心するシュタシ将校〔ヴィースラー〕である」。

〔この文によれば、和解への「根本的転換」は 1985 年に生じたことになる。そうであれば著者の言い分に反して、「1989 年以後」ではなくそれ以前が重要になる。〕

「シュタジ・ファイルの膨大な証拠から我々が知る限りでは」、そうした「フルタイムのシュタジ将校はいなかった」〔シュタジ将校はすべてフルタイムである〕。だからこの将校の改心は「意図的な発案」である。作者自身が「主人公の意図的に独創的な性質と彼の奇跡的な改心のプロセス」を「映画の立ち上げキャンペーン」の中で語った:

> レーニンは熱情ソナタを聴くと悪人になれないと言うが、もしそれを「レーニンのような人が聞かざるを得なかったとしたら何が起こったか」と考えて、「ある光景が私の心に浮かんだ」、「そして数分以内に“他人の生活”のための全体的な基本構想が立ち上がった」(抜粋)[15]。

〔ここに言う「基本構想」とは、「悪人」ヴィースラーが熱情を聴いて改心して善き人を助けるという構想である。このあと著者は筋立て詳論(省略)の上で、以下を結論とする。〕

この映画は「明らかに搾取的な性格にもかかわらず、GDR の過去への関心だけではなく、自国と残りの世界の両方で全体主義支配がどう機能するかへの関心の復活に確実に貢献している。なぜならそれは、歴史家たちが好もうと好むまいと、まさに素敵で、良くできた映画だからである」。

〔しかし作者はその「基本構想」ないし「基本的な筋立て」の映像化に成功しなかった。というのは、すでに繰り返したように、ヴィースラーは最後までドライマンを有罪にしようとし(同前:20 節)、彼の改心は描かれなかったからである。彼は社会主義・共産主義の信念を変えず、「党の盾と剣」であり続けた。だからこそ彼は、ヘムプフやグルビッツを「党の盾と剣」を汚す者として軽蔑する。彼がクリスタだけの守護天使になろうとしたのは、愛情と、彼の 2 度の説得(同前:15・20 節)に応じ「敵対行動」もしないからであって、彼自身の改心の結果ではない。

ドライマンは両独統一後の著書の冒頭に「感謝を込めて HGW XX/7 に捧げる」と記した。HGW XX/7 はヴィースラーのことだが、このような署名形式はシュタジにはない(**5 節**参照)。この献辞をヴィースラーが知る(青木 2020b:28)ことによって、「犠牲者と加害者が…互いに通じ合」い、「和解」となったと著者は解釈する。

ドライマンはヴィースラーの最後の報告書に付いた赤い指跡によって証拠品(タイプライター)を隠したのはヴィースラーだと知り、この献辞を彼に宛てた(青木 2020b:24 節)。

しかしヴィースラーは彼のためではなくクリスタのためにそれを隠した。その経過は次のようであった:

逮捕された彼女は助かりたい一心で、シュピーゲル誌寄稿はドライマンだとグルビッツに証言し、寄稿用の臨時のタイプライターがあったとも答えた。しかし家捜ししてもグルビッツはそれを見つけられない(同前:19 節)。そこで彼はヴィースラーに彼女から隠し場所を自白させるよう命じる。

ヴィースラーは、ドライマンに悟らせないようにするから、「そのタイプライターがどこに隠されているかを私に言ってください」、「そうすれば今夜あなたは再び劇場にいる。あなたの観客の前に、はつらつと」、「半分の自白〔誰が寄稿したか〕は全く意味がない。…証拠〔のタイプライター〕はどこに?」、ドライマンは〔グルビッツへの〕「あなたの証言」ほかによって「どのみち刑務所に行かねばならない。…少なくとも自分を救いなさい。…あなたの観客のことを考えなさい」と説得した(同前:20 節)。

「半分」の自白だけではグルビッツが彼女の舞台復帰のための釈放を許さないので、ヴィースラーは残る半分(証拠品隠し場所)も彼女に自白させて彼女の舞台復帰を実現するが、隠し場所から証拠品を彼が隠すことによって彼女の隠し場所自白を無効にするという工作を実行した。

この工作が成功すればクリスタは救われて舞台に復帰し、シュタジにとってもドライマンを有罪にして案件終了となる。しかし彼の工作は、自白の償いとしてのクリスタの飛び込み自殺という、ヴィースラーにとってやりきれない痛恨の結果になった(同前:21 節)。寄稿の証拠品だけではなく、寄稿者についての証言も消えたためドライマンは救われた。

しかしドライマンは、ヴィースラーによる証拠品隠しにクリスタの自殺による証言消滅が加わって初めて無罪になったことを知らず、証拠品を隠したヴィースラーに救われたと誤解して彼に献辞を書いた。ヴィースラーには、証拠品隠しをドライマンが知り感謝したことに多少の満足があるとしても、彼女を自殺に追いやりドライマンを無罪にしたこの経過は痛恨の極みである。だから「献辞」はドライマンの誤解の産

[15] 典拠(ネット上の Presseheft 8)は今ではアクセスできない。同文が Donnersmarck(2007:170)にある(詳しくは **3 節**)。

物であり、真実に基づく和解の結果ではない。

ドイツ統一後、ドライマンはクリスタ亡きあと新たな女性に愛されつつ、やはり上流に暮らし、敗れたヴィースラーは独りつつましく生きる。〕

3. ゴーリキーのレーニン追悼文：二重の読み誤り

作者はゴーリキーによるレーニンの言葉を「他人の生活」制作のきっかけとした。この言葉は、ゴーリキーのレーニン追悼文（1924 年 1 月死去）の中にあり、ドイツの今も続く文芸誌 Die Neue Rundschau（新展望）の 1924 年第 2 巻に掲載された（Gorki 1924）。以下追悼文と呼ぶ。

ギーゼケは、追悼文ではレーニンは「熱情」を聞くと悪人になれないのだが、作者は、レーニンが「熱情」を聞けば善人になるという「逆の推論」をしたと批判した（**2.3.1 節**）。

だが作者もギーゼケも追悼文の読み方を二重に間違えた。レーニンは熱情をそのように言わず、またこの言葉の場で熱情を聴いたが、革命のためには悪人のままであった。

そもそも 1973 年西独ケルン生まれの若い作者（この映画制作は 30 代初め）が、生まれる 50 年近く前に書かれた追悼文を読んだことに驚いた。

しかし彼の経歴によればそれはあり得た。彼は 14 世紀に遡る貴族家系で、父はカトリック教徒だが、母が「共産主義者」であり、「マルクス、レーニン、トロツキーと共に成長し」、少年時代はニューヨークで過ごし、その後「オックスフォードとレニングラードで学んだ」（Osang 2007）。だから、ゴーリキーにも関心があったのだろう。

まず、ドライマンが追悼文をどの用に利用したかを見よう。映画の中ではドライマンがクリスタにレーニンの言葉を次のように伝えた（Donnersmarck 2007:77）：

> 「私はいまレーニンが”熱情”について何を語ったかを思い浮かべざるを得ない。レーニンは“私はそれを聴くことができない。聴けば、私は革命を完遂させられない”と言った。この音楽を聴いた人、実際に聞いた人がなお悪人でいることができるだろうか？」。

一重下線がゴーリキーが伝えたレーニンの言葉とされ、それを波線下線のように作者が問題提起した。ギーゼケの言う「逆の推論」がこれである（**2.3.1 節**）。

この部分について作者自身の解説は（Donnersmarck 2007:169）：

> ミュンヘン映画学校入学後最初のセメスターにおける 14 本の脚本案提出という重い宿題に悩みながら、寄宿先の叔母の家でギレルス（Emil Gilels）演奏の「“月光ソナタ”の録音を聴いたことを今なお鮮明に思い出す」。
>
> 「その時、突然私の頭にゴーリキーで読んだことが思い浮かんだ」。ゴーリキーによれば、「“熱情”をしばしば聴くことはできない、というのはさもないと“優しい愚かなことを言い”、革命を完了させるために彼が“容赦なくぶちのめさねばならない”人々の頭を撫でようとするからだとレーニンが語った」。
>
> 「私は“熱情”によっては決してそうはならなかったが、しかし“月光ソナタ”の場合に突然私はレーニンの言明を理解することができた。すなわち、少なからぬ音楽はとにかく、イデオロギーや原理よりも人間らしさを、厳しさよりも愛を優先することを余儀なくさせる、と」。
>
> そこで「私は、レーニンのような人が“熱情”を聴かざるを得なかったとしたら何が起こったかを自問し」、「惨めな部屋の中の 1 人の男」が「この音楽を聴くのは自分の楽しみのためではなく…彼の理念の敵…を盗聴しなければならないから」だという「光景が浮かんだ」。
>
> 「そして数分以内に“他人の生活”のための全体的な基本構想が立ち上がった」。

追悼文によれば「レーニンのような人」は善き人である。そういう人に熱情を聴かせても善き人のままであるから物語にならない。だから作者は「レーニンのような」善き人ではなく、「惨めな部屋」で盗聴するシュタジの悪人ヴィースラーに熱情を聴かせる（①）ことにした。その上ヴィースラーは実際の映画では熱情を聴いても善き人に改心せず、ドライマンを有罪にしようとする悪人のままである（②）。

従って作者が思い浮かべた上記の「光景」と実際の映画は二重（①と②）に異なる。しかも②については、ヴィースラーは単なる盗聴者ではなく、革命信念と正義感のある人物となり、革命の敵には悪行を辞さない、それこそ「レーニンのような人」であり、レーニンとの違いは指導者でないことだけである。後述のように、追悼文にあるレーニンも、実際に熱情を聴いたが、革命の敵を「無慈悲に」叩き続ける。

では追悼文のこの映画の関連部分を抜粋・紹介する。25 ページの長文の最初の部分である：

> 「レーニンが亡くなった。彼の敵陣営でさえかなりの者が…世界は“彼の時代のすべての偉大な男たちのうちで天才性を最も強く体現した”1 人の人間を失うことを率直に認めている」。彼は「歴史と生活様式が常にソドムとゴモラを思い出させるロシアでのみ」「常に予期せず現れる意志と才能の男たちの一人」であり、「ピョートル大帝やロモノーソフ〔多方面の科学者、モスクワ大学創設〕、トルストイその他」に比肩する。
>
> 「レーニンのように人々よりも卓越し、彼のように名誉欲の誘惑に抵抗し、“小さな人々”のための温かい関心を保持した人をほかには考えられない」。
>
> 「彼の英雄的精神は、この世での正義の可能性を誠実に信じる誠実なインテリグループ出身の 1 人のロシア革命家の、ロシアでは珍しくない、控え目な、禁欲主義的な殉教精神である」。
>
> だから彼は「人類の幸福のための困難な活動のことを考えて世間のすべての喜びを断念した」。〔その例証として以下の逸話が続く。〕
>
> ある夜モスクワのペシュコフ夫人（Frau E. Peschkoff）の住まいでベートーベンの幾つかのソナタの演奏を…聴いた時に、レーニンは「熱情ソナタよりも美しいものを知らない」などと激賞した。
>
> そのあと彼は、「しかし、しばしば私は音楽を聴くことができない」（“oft kann ich Musik nicht hören;”）、なぜなら「音楽が神経に作用し、親切なばかげたことを話し、人々の頭を撫でたくなる」からである、「今では誰の頭も撫でてはならない。さもないと彼らが誰かの手を噛み切る。彼らの頭を叩かねばならない、我々は理想としてはいかなる暴力行使にも反対であるにもかかわらず、無慈悲に叩かねばならない。ふむ、地獄のように困難な職務だ！」と、「苦い笑みを浮かべて付け加えた」。

この文章によればレーニンは「ベートーベンの幾つかのソナタ」を聴き、特に熱情が「美しい」と語った。だからこの

場、つまり革命の最中に彼は「幾つかのソナタ」の 1 つとして熱情も聴いた。それを聴いても革命の大業のためには「地獄のように困難な職務」を果たす悪人であり続けた。

またレーニンが「しばしば聴くことはできない」と言ったのは明らかに熱情だけではなく「音楽」一般であった。だがそれを熱情だけのことと作者が誤解し、ギーゼケを含む批評家たちもそれを鵜呑みにした。しかも聴くことができないのは「しばしば」であって、常にではない。現にレーニンはペシュコフ夫人宅で生演奏を聴いた。

従って作者の追悼文理解は幾重にも誤りであり、また熱情を聴けば悪人が善き人に改心するという作者の「基本構想」は追悼文の「逆の推論」に当たらない独自の着想である。

むろん独自の着想としてはとても興味深いのだが、実際の映像化に成功しなかった。面白いことにヴィースラーも、作者の着想と異なり、レーニン同様に、熱情を聴いても社会主義の敵に悪人であり続けるので、追悼文に沿っている。

追悼文ではこのあと、以上のレーニンの言葉と権力維持行動に対するゴーリキーの感想が続く:

> 「人民の誠実な指導者の職務は非人間的なほどに困難である。あれこれなんらかの程度に独裁者ではない指導者は考え得ない。レーニンのもとでおそらく、タイラーやミュンツァー、ガリバルディのもとでよりも多くの人間が殺された。しかしレーニンをトップとする革命への抵抗もより広範かつより強力に組織された。〔第 1 次世界大戦が示すように〕“文明”の発展とともに人間の生命の価値が明らかに下がったことも考慮されねばならない」。
>
> 「ロシア革命の残忍性を語る“道徳主義者”」は 4 年間も世界大戦を「あらゆる方法で“完全な勝利まで”扇動した。その偽善こそが忌まわしい」。

追悼文はさらに、「1917-1921 年にはレーニンとの私の関係は、私が望んでいた通りでは全くなかった」と記し、レーニンとの議論(例えば「革命的な戦術の残酷さ、それによってもたらされた暮らし向き」について)や、レーニンの業績とその特徴などを記し、最後に彼こそが従来存在しなかった「本当に世界の“永遠の記憶”に値する人」であり、彼は死んだが、「彼の知力と意志の遺産は生きている」と締めくくった。

4. 東独の高い自殺率は体制ゆえではない

この映画では演出家イェルスカの自殺とその追悼のためのドライマンのシュピーゲル誌寄稿が重要な役割を果たした。同誌寄稿がドライマン改心の最初の行動であった。

作者は、ドライマンの寄稿の形で東独当局の自殺統計隠蔽や自殺率の高さを批判し、体制を糾弾した。ところがその内容をヤング論文(Young 2014)やグラスホフ論文(Grashoff 2019)が痛烈に批判した。

彼女はロンドン大学ユニバーシティカレッジ(UCL)のスラブ・東欧スクール(SSEES)在席のロシア文学専門家で、国際ドストエフスキー協会英国代表でもある[16]が、東独自殺死の詳細な調査も行なった。

ヤング論文は、「ある受賞映画」〔この映画〕の自殺描写の非現実性に「グラスホフは気付いている」とある。但しグラスホフの研究内容は紹介されていない。当時彼はヤングの職場に DAAD(ドイツ学術交流会)から派遣された現代ドイツ史講師であった。

グラスホフはすでに学位請求論文(2006 年)において東独の「高い自殺率を専ら独裁下の生活環境に帰することは許容し得ない」ことを立証した(Badenberg 2010)。この学位論文を入手していないので、その要旨が含まれると思われるグラスホフ論文(Grashoff 2019)をまず取り上げる。

なお Badenberg(2010)によれば、マグデブルク大学病院精神科医長ゲンツ(Udo Genz)が同地の死亡診断書にある自殺 676 人を調べると、うち 400 人強が 1985-1989 年、200 人強が 1999-2004 年であった。従って、体制転換後の自殺はおよそ半減であり、特に 65 才以上の自殺が前者の 163 人から後者では 24 人と激減した〔自殺減少の 7 割近くを占める〕。理由として、統一後の高齢者介護ホームの改善〔や年金引き上げ〕などの生活環境改善、自殺の「穏やかな方法」(バルビツール酸服用)や従来自殺女性の 2 割を占めたガス中毒が不可能になったこと(都市ガスから天然ガスへの切り換え)が挙げられた。

この調査結果は以下の両論文にある「1980 年代に初めて目に見えるようになった」現象と同様であると考えられる。

4.1 グラスホフ論文

グラスホフ論文は、要約、西側での虚像、幽霊が西側に出没、ファクト・チェック、東独自殺者の行動パターン、誤解の持続要因、結論からなり、包括的で事例検討も多い。

そのうち、この映画における演出家イェルスカの自殺問題への言及と主要結論を紹介する。イェルスカ問題は「幽霊が西側に出没している:学術的かつ人気のある見方」という項目の中で言及された。

「政治的抑圧が多くの東独人を自殺に追い立てたという仮説」が「幽霊」となって「時々現れ、一時的に見えなくなるが、何度も戻ってきた」。

1959 年に西独の人口学者ウンゲルン-スターンバーク(Roderich von Ungern-Sternberg)が東独の高い自殺率の「主な原因」を、「詳細」抜きに、「より困難な生活条件」にあると主張した。1963 年にはシュピーゲル誌も「高齢者の高い自殺率の責任を東独政権に責任を負わせた」。

自殺統計公表停止[17]後も「数十年にわたり信頼できる証拠なしに幾人かの著者がこの問題について強い見解を表明した」。そこには西独の研究者やジャーナリスト、テレビドラマのほか、東独のノイバート(有名な Neubert 1998 の著者)や〔上記の〕作家フックスも含まれる[18]。

「40 年後」〔2006 年〕に、映画「他人の生活」が「東独の自殺率の全体主義的な組み立てを復活させた」。すなわち「何年もの職業禁止のあとに首を吊った」イェルスカである。映画研究者オブライエン(Mary-Elizabeth O'Brien)のこの映画の「称賛」理由は、「特にその自殺の描写において尻込みしていない」ことであった。

一般的には「反政権」活動による自殺の可能性はある。しかしイェルスカの自殺原因を「政治的抑圧に単純化することは…イェルスカの個人的その他の問題を無視することになる」。すなわち「うつ病」と「過度のアルコール摂取」であ

16 ヤングの自己紹介サイト http://sarahjyoung.com/site/about/。

17 公表停止は統計年鑑 1963 年版から(**表 1** 参照)。

18 Grashoff(2015)は刑務所での自殺は東独より西独のほうが多かった理由を説明し、この件でもノイバートを批判した。

る。だから彼の自殺を東独の「高い自殺率に関連させる」ことは、「完全に誤解を招くことになる」。

「ほとんどの東独異論派にとっての現実は異なっていたことがより重要である」。すなわち、その「多くは望まない仕事に就かねばならなかったが、若干は…〔西独への〕移住を選んだ」。

イェルスカ葬儀ではドライマンが「自殺する人々を冷酷に無視していると東独国家を非難」し、それがシュピーゲル誌への寄稿の「素材」になった。

〔ドライマンは葬儀の際に声に出して「非難」したわけではなく、彼の「脳裏」に「ある文章」を浮かべただけである（その内容は青木 2020b:16）。その文章がのちのシュピーゲル誌への彼の寄稿の「素材」になった。〕

ドライマンのシュピーゲル誌寄稿を報じた「西独のテレビニュース」が「東独の自殺率」と東独の「芸術家たちの最近の自殺を結びつける」（詳しくは同前:19）。これによって、「この映画は、いかにして西の人間が東における個人的な絶望を政治的非難に変換したかを無意識に示している」。

〔上記の「ある文章」が言及したのはイェルスカの自殺のみで、グラスホフが言うように西独テレビが「最近の東ベルリンの演出家イェルスカを含む一連の有名な東独芸術家たちの自殺」に関連づけた。もちろんこの誇張は作者がテレビニュースに言わせた。なおシュピーゲル誌への寄稿文自体の内容紹介は上映版はもちろん脚本にもない。〕

「明らかにこの映画の情動効果が観客にそれ〔自殺〕の本当の詳細よりも強い影響を与えた。この映画の繊細さにもかかわらず、その筋は政治的抑圧と自殺の間の関連性を示唆すると思われる。同様の種類の還元主義は、東独の自殺についての何十年も続いてきた公の言説の特徴である」。

そのような言説は東独の自殺率公表〔東独統計年鑑 1956 年版が最初〕から始まったが、同時にそれは体制の特徴ではなく地域の特徴だとする反論もなされた（1960～1966 年の論文が紹介される）。

反論は「1960 年代には東西の専門家の間である程度受け入れられた」が、「西独の政治家やジャーナリスト」、「SED 指導部」および「一般の認識には最小限しか影響しなかった」。

そのため「高い自殺率が DDR〔東独〕の国際的な評判を損なう恐れ」に、「1960 年代の自殺率のわずかな増加」が加わり、東独指導部によって「自殺統計が 1963 年初めに〔正確には統計年鑑 1963 年版から〕機密扱いにされた」。「9 年後」には統計年鑑は「年間犯罪率」も載せなくなった。

但し東独は WHO に「1968 年と 1969 年の自殺率を報告し、それが西独統計年鑑 1973 年版（S.34*）に載った。

〔実際には西独統計年鑑 1973 年版にも 1972 年版にも東独自殺率は載っていない。1974 年版（S.34*）に 1969 年の、翌年版（S.34*）に 1970 年の東独自殺率がある（各数字は下記の**表 2** の注参照）。〕

1968 年 12 月にポツダム県の精神科医シュパーテ（Helmut F. Spate）が県幹部に「記録をしまい込むことによって問題を解決することはできない」と警告したが、無駄だった。

それでも東独内では自殺研究が続けられたが、「オープンな議論」はできなかった。〔1977 年からは専門家にもデータが伏せられた（**4.2 節**参照）〕

だから「ドイツ再統一の時に〔政治的要因に帰着させる〕まったく同じ議論がもう一度始まったことは殆ど驚くべきことではない」。かくて「共産主義的独裁」ゆえに自殺が増えたという説が学術的にも公共の場でも「何十年も続き」、「なお顕著である」。

しかし東独地域での高い自殺率は 19 世紀以来であり、「特定の政治体制の結果ではあり得ない。君主制であれ、あるいは民主主義〔ワイマール憲法時代〕、ファシズム〔正確にはナチズム〕、社会主義であれ、自殺の頻度は大きくは変わらなかった。事実、GDR〔東独〕における政治的動機による自殺率は全体の 1～2%にすぎなかった。政治的、経済的、または社会文化的〔のうちの社会制度的〕要因は、自殺率に大きくは影響しなかった」。

抑圧の影響がより顕著な「2 つの集団（囚人と新兵）」でさえ〔東独の〕「より高い自殺率の証拠は存在しない」。

むしろ「GDR の高い自殺率を理解するためには、1945 年よりずっと前に存在した地域的な行動パターンと結びついたドイツ内の東と西の間の長期的な違いを認めなければならない。メンタリティや宗教的信念、離婚率などの社会文化的要因が、政治的抑圧よりもはるかに重要な役割を果たした」。宗教では「特にプロテスタント主義」が重要である。

東独の「自殺の過度に政治的な解釈へのこだわりを助長した」のは、「犠牲者と遺族の多くが政治的な言葉で自殺を組み立て」、それを西メディアが利用したこと、「重要な個人的および病理学的側面」が軽視されたこと、また GDR 当局が自殺問題をタブー化して「根本的原因についての憶測の炎をあおった」ことである。

「要するに SED 政権の政策が自殺した人々の数を著しく増加させたわけではない。1960 年の〔農業〕強制集団化キャンペーンの間に何十人もの農民が自殺した時でさえ、全体の自殺率への影響はほとんど検出できなかった」。

他方で、「完全雇用や低い犯罪率、包括的な社会福祉にもかかわらず、まさに国家社会主義が自殺率を引き下げることができなかったという事実」は、「全体主義的な野心を持った国家」の社会発展への影響力の限界を明らかにした。

「西の誤解」は東独終焉後も続いた。東独の自殺率が下がって、「自殺率が今やドイツの東部と西部でほぼ同じレベル」になり、それを「自由化と民主化の成功と解釈したくなる」からである。

しかしこの自殺率低下がドイツ「再統一の結果ではほとんどなかった」ことは、「利用可能な統計の周到な考察」、特に世代別分析（高齢者の自殺率が高く、戦後生まれでは低い）によって明らかである。

実際には自殺率格差の縮小はすでに「1950 年代」から徐々に生じ、「1980 年代に初めて目に見えるようになった」。

しかし当時は、皮肉にも自らの自殺研究制限により東独当局はそれに気付かなかった。「西における反共産主義感情も同様に類似の歪んだ見方」に留まった。

ようやく「1990 年以後の両独における自殺率の注目すべき低下がようやく認識された」。

4.2 ヤング論文

ヤング論文によれば彼女は、体制転換後に東独の自殺について旧機密資料を含む詳細な調査をして、「GDR における自殺に関する博士論文を書いた」。それに基づいて、この映画の自殺と自殺統計の扱いを次のように批判した:

「西部ドイツの映画製作者〔ドナースマーク〕の助手と自己紹介した女性」が自宅に電話してきて、「ある映画の中の追悼の辞」について「私の緊急の援助」を求めた。「これは 2005 年頃だった。そしてかなりあとになって初めて私は“他人の生活”の制作に参加したことに気付いた」。

〔助手かヤングの記憶か、どちらかが不正確である。この映画の上映版にも脚本にもイェルスカ葬儀の際にドライマンの脳裏に浮かぶ文章しかなく、「追悼の辞」はない。この文章がシュピーゲル寄稿の原型となった。〕

「この映画は驚いたことに世界的なヒット」となり、「東独独裁政権のイメージを東独史に関するいかなる学術書よりも一層多く形成し」、「信頼性が高く、歴史的に正確だと称賛された」が、同時に「もちろん、誰もが物語を受け入れたわけではない」〔その例として 3 人[19]を挙げる〕。

「私は〔この映画への〕異議のリストにもう 1 つの批判を加えたい。この映画が GDR〔東独〕の高い自殺率は政治的抑圧の結果だという印象を作り出した」ことについてだ。

「ドライマンが書いたエッセー〔シュピーゲル誌寄稿〕は壁の両側で政治的センセーションと見られる。西独のテレビニュースが GDR の自殺率を東独芸術家の最近の自殺数と結び付ける。助手が我々の電話の間に映画のその部分に言及したかどうかを私は思い出すことができない。しかしもし彼女がそれに言及していたら、私はやはり変更の必要はないと主張しただろう」。

なぜか。それが「デタントの時代にさえ」残る「GDR〔東独〕についての西側の典型的な認識」だったからである。「おそらく映画の観客の多数」も「同様」だし、研究以前には「私自身の推測も全くは異なるものではなかった」。

〔「その部分」の「変更の必要はない」と言っただろうと彼女は回想するが、「その部分」に言及があったかどうかを覚えていないのだから、「“他人の生活”の制作に参加した」中味は別にあるはずであり、その際に史実を伝えたかもしれないが、彼女が何を助言したかは記されていない。〕

「事実、東独の自殺率は一貫して西独よりも 50%高く、壁の崩壊まで毎年約 6000 人の自殺が記録された」。

〔実際には下記の**補足**の**表 1** と**表 2** の限りでは、1946-47 年と 1989 年以外は 5000 人前後で推移し、**表 2** によれば自殺率は漸減の趨勢にあった。1988 年自殺率 28.6 は日本の 19.3(**表 3**)に比べ約 1.5 倍であった。当時の人口は日本が東独の約 7.4 倍であった(両国統計年鑑)。〕

しかし共産圏との「政治体制の違い」の有無にかかわらず、「オーストリア、チェコスロバキア、デンマーク、ハンガリー、フィンランドでも…高い自殺率であった」。〔映画では自殺率ヨーロッパ 1 位がハンガリー、2 位が東独であった。〕

しかも「ドイツ帝国、ワイマール共和国、第三帝国のうちの、のちに GDR となった部分の自殺率は、西独〔となった地域〕の自殺率よりも一貫して高かった」。

東独統計年鑑が自殺統計を載せたのは 1956-1962 年版〔および 1990 年版〕のみだが、統計局は「国家機密」として「プロイセン的正確さで自殺」を記録し続け、「専門誌」ではその問題が議論され続けた。「1977 年からは専門家でさえデータにアクセスすることができなかった」。

〔体制転換後に以前のデータにもアクセス可能になり、ヤングも利用した。また最後の東独統計年鑑 1990 年版には 1980 年代の数字が載った(**表 2**)。最初の東独統計年鑑である 1955 年版は 1956 年版以後に比べおよそ半分のボリュームしかなく、そこには自殺統計がなかった。〕

〔博士論文作成のため〕「私はすべてのあり得る説明を調べ、囚人や兵士、若者など特定の社会集団を観察し、利用可能なすべての統計データに接した。しかし結果はまたしても驚きだった」。若者の自殺率は 1970 年代までは西独に比べて「著しく高い自殺率」だったが、その後「GDR 生まれの若者世代」では「ほとんど差が見られなかった」。

東独保健省は自殺防止のために「2 つの自殺防止センター」を設立した。〔但し後述によれば、SED 指導部が自殺防止活動を削減した〕。

「政治的抑圧の影響を立証」しようと、「私は個々のケースの調査やインタビューの実施、シュタジのファイルや別れの手紙の読み取りに何年も費やした」。

その結果「私が気付いたのは」、自殺は「ほとんど常に強力な個人的状況によって引き起こされ」、「政治的要因は小さな影響しかない」ということであった。

「もちろん、例外はあった。特定の短期の歴史的な瞬間には政治的動機による自殺が普通だった。例えば心理的テロのために何ダースもの農民が自殺した 1960 年春の〔農業〕強制集団化の期間である」。

SED 指導部が「非難され得る」のは、「高い自殺率のためではなく、自殺を政治的タブーにしたことと、自殺防止策をその導入直後に縮小したことのため」である。指導部が「自殺問題を隠したことによって…根強い神話」が生じ、この映画によって「それが再現された」。

〔補足:東独統計年鑑に公表された自殺統計と日本〕

東独の自殺統計は、最初の統計年鑑 1955 年版には載らず、当初は 1956 年版～1962 年版に載った(**表 1**)。

半年統計しかない 1946 年を別にすると、1947-1960 年の年平均は 5153 人である。平均値を上回るのは 1947-1952 年と 1960 年であり、1953-1959 年は 5000 人を切った。性別・年代別自殺統計もあった。

表 1 東独における自殺数(1946–1960 年)

1946	3224	1951	5339	1956	4696
1947	6504	1952	5254	1957	4470
1948	5545	1953	4981	1958	4928
1949	5537	1954	4672	1959	4660
1950	5405	1955	4962	1960	5185

(原注)1946 年は後半のみ。
(出所)東独統計年鑑 1956:96; 1962:75

1961 年(壁建設の年)の自殺統計が載るはずの 1963 年版から、1989 年版まで自殺統計が載らなかった。

ようやく 1990 年版(最後の統計年鑑)に自殺統計(**表 2**)が載り、1980 年代には 1982・1987 年以外は減り続けた。

表 2 東独の自殺の数と率(1980–1989 年)

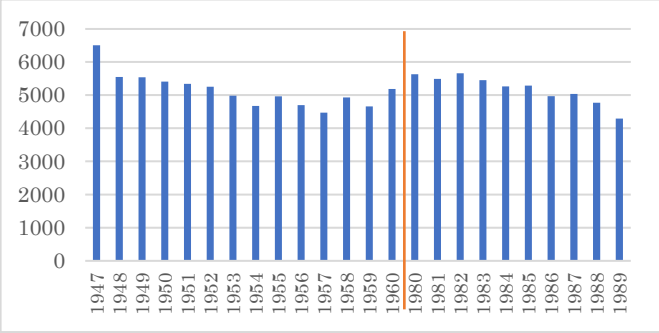
	計	男	女	率	率男	率女
1980	5627	3480	2147	33.6	44.3	24.1
1981	5491	3475	2016	32.8	44.2	22.7
1982	5658	3544	2114	33.9	45.1	23.9
1983	5450	3494	1956	32.6	44.4	22.1

[19] ファンダー(**2.2.2 節**)と、Slavoj Žižek、Mary Fulbrook。

1984	5263	3371	1892	31.6	42.8	21.5
1985	5286	3434	1852	31.8	43.6	21.1
1986	4968	3206	1762	29.9	40.7	20.2
1987	5035	3295	1740	30.3	41.6	19.9
1988	4768	3155	1613	28.6	39.7	18.5
1989	4294	2875	1419	25.8	37.1	17.4

(注)男・女は計の内数。率は人口 10 万人当たり自殺数。西独統計年鑑 1974 年版と同 1975 年版(各 S.34*)に掲載の東独自殺率は 1969 年 28.7、1970 年 30.5 である。
(出所)東独統計年鑑 1990:436。

図 1 表 1 と表 2 の各年計の図示



(注)半年統計の 1946 年は省いた。数字欠如の 1961-1979 年にやや増加したことになる。

比較のため日本の 1980 年代の自殺を掲げる(**表 3**)。

表 3 日本の自殺の数と率(1980–1989 年)

	計	男	女	率	率男	率女
1980	21,048	13,155	7,893	18.0	22.9	13.3
1981	20,434	12,942	7,492	17.3	22.3	12.5
1982	21,228	13,654	7,574	17.9	23.4	12.6
1983	25,202	17,116	8,086	21.1	29.1	13.3
1984	24,596	16,508	8,088	20.5	27.9	13.2
1985	23,599	15,624	7,975	19.5	26.3	13.0
1986	25,524	16,497	9,027	21.0	27.6	14.6
1987	24,460	15,802	8,658	20.0	26.3	13.9
1988	23,742	14,934	8,808	19.3	24.7	14.1
1989	22,436	13,818	8,618	18.2	22.8	13.8

(出所)警察庁生活安全局生活安全企画課(2009:4)

厚生労働省(2020:第 1-36 図と付表)によると、自殺率上位 20 ヵ国のうち旧共産圏が 13 ヵ国(ロシアやバルト三国を含む旧ソ連内の 8 ヵ国と旧ユーゴ 3 ヵ国、ハンガリー(11 位、18.0)、モンゴル)を占め、ほかに韓国(3 位、26.5)、日本(9 位、18.5)などが含まれる。1 位はリトアニア(28.8)である(数値は WHO による 2015-16 年時点)。

日本の自殺率は 1991 年に 17.0 まで下がり、その後漸増したあと、1998 年に 26.0(うち男 37.1)と激増し、2003 年の 27.0(男 40.0)を頂点に、その後 2009 年まで漸減、そのあと 2019 年 16.0(男 22.9)まで急減した(厚生労働省 2020:第 1-3 図と付表)。

5. 東独秘密警察(シュタジ)の非現実的な描写例

この映画は芸術家たち、とりわけドライマンとクリスタの体制との関わりの描写に大きな魅力を感じさせるが、シュタジの描き方の多くは宣伝に反して史実に合わない。その上小道具に使った新聞の日付さえ間違える(青木 2020b:22a 節)など時代考証もずさんさである。

ビアマン(**2.1.1 節**)やシュルツ(**2.1.2 節**)、ギーゼケ(**2.3.1 節**)にはこの映画が描くシュタジの非現実性がいくつか挙げられたが、それぞれ多少の例示に限られた。そこでその他の例を追加したい(網羅ではない):

●ヴィースラーは丸見えの同じ路上に秋も冬も春も同じ服装で立ったまま、時々あからさまにメモを取りつつ、長時間の監視を何回か行ない、全く同じ服装で住民と同じ階段を使ってアパート屋根裏に 4 ヵ月も毎日定時に通い、時にはドライマン宅に侵入する。

だから当然彼の素性は住民マイネケ夫人にばれた(青木 2020b:10,13)が、ほかの住民も気付くはずである。彼の自宅のあるアパートの住民にも彼の素性がばれていて「シュタジのブタ」と罵られたり落書きされ(2020b:9)(上映版ではカット)、少年には「あんたは本当にシュターージにいるの？」と聞かれる(2020b:14)。

シュタジの監視作戦 OPK(作戦的人物コントロール)では、相手にそれと分らせて圧力にする場合もあったが、この映画のケースはそうではないのだから、ヴィースラーの行動と服装は作戦にふさわしくない。

また IM でさえ「敵対的・否定的」グループの集まりの最中にその場で参加者の人数や名前、発言内容などをメモすることはできない。IM と分るからである。それでも彼らは詳細な通報と、場合により分析を示した。アンソロジー「ベルリン物語」事件の際の色々な IM 通報も詳細であるが、中には聞き取り損ねた名前を確認することさえ、IM と「疑われないように」避けたケースがある(青木 2020a:38)。

むろんその際に、成績のためか、事実を誇張ないし虚偽を加えるもあったらしい。BStU で読んだローザ・ルクセンブルク・デモ事件(1988 年)関連の多くの IM 通報の中でマキシミリアン(Maximilian)の通報が特に知的で優秀だと感じた。本名はイブラヒム・ベーメであった。

但しベーメの通報は、1970 年代に彼の主要な標的であった作家クンツェ(Reiner Kunze)によれば、「話をおおげさにしたり、事実無根の推測を交えたりし」、シュタジも「それを承知していた」(クンツェ 1992:153)[20]。

[20] イブラヒム・ベーメ(Ibrahim (元は Manfred) Böhme、1944-1999)の IM としての暗号名はマキシミリアンのほか August Drempker と Paul Bonkartz〔両暗号名でクンツェについて通報〕、Bernd Rohloff。クンツェ(1992:152-3)にあるベーメの経歴の補足として以下を紹介する。

1944 年生まれ、1947 年母死去に伴い当初里親に育てられ、1949 年から孤児院、1952 年父の元へ戻った。父はハレ近くの〔東独化学産業の最大企業である〕国営ロイナ工場(VEB Leunawerke)の燃焼施設組み立て工かつ SED 幹部であった。

息子ベーメも 1962 年入党、1963-1965 年同企業の見習い寮の教員となるが、1965 年ハーベマンの党除名を批判して党の厳重戒告となった。その処分に抗議した寮の見習たちの中に国家保安相ミールケの義理の娘もいた。1965 年からグライツの図書館で働きつつ、司書の通信教育を受けた。1968 年グライツの青年クラブ責任者となったが、プラハの春への共感を表明して解雇かつまたも党による厳重戒告となった。

1969 年 1 月にグライツのシュタジによって IM となり、クンツェについて通報。その後 1970 年代にはグライツの文化同盟の書記やゲラの科学図書館司書として働き、1978 年にマグデブルク駅チラシ行動でシュタジに逮捕されたが、ミールケの指示で釈放。

その後 1983 年まで劇場広報係やウェーター、ロシア語教師、労働者、司書などを経て、1984 年からシュタジの委託でメクレンブ

●ヴィースラーはその OV 報告書末尾に「HGW XX/7」と時刻とを記す。HGW は Hauptmann Gerd Wiesler(大尉ゲアト・ヴィースラー)の略語、XX/7(第 XX/7 部)は彼が所属するシュタジの職務単位である。このような担当将校の略語例もそこに所属や時刻を記す例も見たことがない。

例えばアンソロジー「ベルリン物語」に対するシュタジの大規模な「作戦重点“自主出版”」において主要な役割を果たしたシュタジ大尉ペニッヒ(Rolf Pönig)の報告末尾に「HRP XX/7」と書かれることはなく、「Pönig Hauptmann」(ペニッヒ 大尉)とある。これは報告者(=通報した IM の指導将校)の姓と地位である。彼の所属は冒頭にある報告先「XX/7」(第 XX/7 部)と同じだから末尾には繰り返さない。日付も冒頭のみにある(Plenzdorf 1995 に多数)。

同様に上記の IM マキシミリアンのローザ・デモ事件通報の報告書の末尾は「エーデル 少佐」(Edel Major)であり、所属も日付も無い。冒頭に報告先「Hauptabteilung XX/9」(第 XX/9 部)と日付が書かれた。第 XX/9 部は「政治的地下活動」対策を担当した。

ペニッヒは、長期の IM かつのちに作家同盟会長になる著名作家ヘルマン・カントやベルリン県作家同盟議長ギュンター・ゲールリッヒの指導将校であり、シュタジ末期を第 XX/7 部第 IV 課(「ライン“作家”、OV 活動、政治的地下活動対策」担当)課長代理として迎えた(青木 2020a:9-10; Walther 1996:844)。

ヴィースラーも第 XX/7 部所属であり、「Wiesler Hauptmann」(ヴィースラー、大尉)と署名すべきであった(青木 2020b:27)。Lindenberger(2008)もシュタジ将校は「実名でその報告書に署名した」と指摘した。

●ヴィースラーのように「共産主義」も近いと考える(青木 2020b:8)人物は、SED の公式イデオロギー(脚注 12 参照)の教育を受けるシュタジ内では多分いなかっただろう。

●第 XX/7 部長であるグルビッツが教会や平和運動の対策も指揮するが、それは第 XX/7 部の担当ではない(2020b:18)。事案によって担当が重複する場合は別として、他の職務単位の担当事項に口出しすることはあり得ないし、あれば相手が黙っていないだけではなく、職務分担規定違反として処分もあり得る。

●グルビッツは一存で少尉シュティグラーと大尉ヴィースラーを地下の小さな郵便開封室に配転する(青木 2020b:11・22 節)が、そもそも当時は開封も封緘も大規模かつ自動化され、小部屋での手作業ではなかった(青木 2021b)。また郵便検閲は少将シュトローベルが指揮する大規模な M 部の所管であり、グルビッツが一存で不良職員の配転先にすることはできない(詳しくは青木 2020b:11 節)。

●この映画に頻発し、ストーリー展開の柱の 1 つであるシュタジの「作戦事案ラツロ」(OV Lazro)は、シュタジの OV 規定(Richtlinie 1/76)に著しく反しており、実際にはあり得ない。このケースでシュタジが作戦を発動するなら OPK(作戦的人物コントロール)である(青木 2021b 参照)。

その上この映画では「OV」が文化相ヘムプフの一言で発動され、OV 文書にもそう明記された(2020b:8,26)。2.1.1 節でも指摘されたように、シュタジがシュタジ大臣(国家保安相)以外の大臣の指示、それもシュタジの OV 規定に反する指示に従うことは全くあり得ない。

この映画で実際に展開される作戦の大部分は単なる監視であり、容疑の有無の調べである。OV は明白な容疑にのみ発動されたのであり、この映画で OV 開始が可能になるのはようやくクリスタがシュピーゲル誌寄稿者(ドライマン)を証言した時(青木 2020b:19 節)である。

この映画の当時適用されていた OV 規定(詳細は青木 2021b)はアンソロジー事件の成果を踏まえて整備されたものであり、同事件の実際の経過(青木 2020a)がこの規定の具体的適用像を示している。映画の宣伝パンフにはこの OV 規定の抜粋が載ったが、作者らはきちんと読まなかったか、読んでも無視したことになる。

●元シュタジ幹部、しかも演劇界の大掃除で名を挙げた人物が文化相になることはあり得ないし、実際その例は無い(青木 2020b:6)。

●文化相の運転手ノヴァックが本来業務の時間中にクリスタの監視役になる(2020b:14,19)こともあり得ない。

●ドライマン宅のあるアパートの屋根裏部屋に盗聴・監視センターを作り 12 時間交替で 4 ヵ月も、住民と同じ階段を使って出入りを繰り返し日々屋根裏からタイプライターの音や話し声、電話の音がする。これもあり得ない。シュタジの実際のやり方は青木(2020b:脚注 14・19)。

●ヴィースラーが作戦上の必要もないのにドライマン宅に侵入し、その上ブレヒトの本を自宅に持ち去ることもあり得ない。これは泥棒である。しかも実はクリスタのベッドに触れることが目的だった(青木 2020b:13 節)。

6. ミューエが語る体制体験と改心しないヴィースラー像

シュタジ大尉ヴィースラーを演じたミューエ(Ulrich Mühe、1953-2007)は東独ライプチッヒ県グリマ(Grimma)に生まれ、1975-79 年ライプチッヒ演劇大学(Theaterhochschule Leipzig)で学び、カールマルクスシュタット(旧・現ケムニッツ)で活動後 1983 年から東ベルリンのドイツ劇場(Deutsches Theater)で活躍し、ヘレーネ・ヴァイゲル賞や批評家賞を得た。また 1989 年 11 月 4 日に催された東ベルリン・アレキサンダー広場での大集会とデモの発起人の 1 人となった。二度目の結婚(1984-1990 年)相手が女優グレルマンであった。この映画公開翌年死去した。

この映画公開の 5 ヵ月前、2005 年 10 月 22 日に、彼は作者ほかの、〔東独育ちの彼への〕「強い好奇心」によるイン

ルクや東ベルリンの反体制教会グループの中に入り込んだ。

1985-1986 年にはパンコウ区郡文化会館長や福音教会補助労働者。1986 年フィッペロウ・平和セミナーに参加してポッペ夫妻(Gerd u. Ulrike Poppe)と接触し、IM の一種 IMF になった。

1989 年にはメッケル(Markus Meckel)らとより緊密になり、同年 6 月 28 日の社会民主党(SDP)設立呼びかけに協力。同年 10 月 7 日 SDP 設立とともに幹事長に選出。同年 12 月からの中央円卓会議に SDP 代表として参加、1990 年 2 月〔SDP から改称の〕東独社会民主党(SPD(DDR))議長、直後の選挙で東独人民議会議員かつ SPD 会派議長。

その直後 4 月に IM 非難が生じ SPD(DDR)の全役職を辞任したが、同年 7-12 月に東ベルリン警察全権委員、9 月 SPD 党幹部会員に就任。同年 12 月作家クンツェが彼の IM の証拠を暴露し、〔本人は否定するが〕1992 年 6 月「党を傷つける重大な行為」ゆえ SPD から除名された(Müller-Enbergs 2010:146f.)。

なお、IMF は 1979 年以来 IMB という呼ばれ、「敵との結び付き」対策や「敵対的活動」容疑の処理に当たる IM である(BStU 2015)。

タビューに応じた（Donnersmarck 2007:182ff.）[21]。

その中でミューエはこの映画についてや、彼の 18 才からのホーネッカー時代とそれまでの少年時代に経験した東独生活について詳細に語り、とても興味深い。以下はその要約である。要約は発言順序に関わりなく同一テーマをまとめることがある。ミューエを「私」と表記する。＜＞が質問、各項目のタイトルは青木。

●ミューエにとってのこの映画の魅力はシュタジではなく芸術家たちの描写

「シュタジ問題を含めて DDR の現実」について、この映画は「誰かが書き得るとは私は思わなかった脚本」であり、「すべて本格的だと感じ」た。1990 年代に読んだ「多くの脚本」は「あまりに手短にまとめられ」たし、「それらは事実に合っていないといつも感じた」。この映画で「初めて私は、DDR について、その歴史を確実に感じ取られる本を手にした」。「“しかし今度は誇張だ”と言わざるを得なかった」。

シュタジについては「私は技術的細部を詳しくは知らない」〔ので、その点の評価はできない〕。

しかしこの映画と同時代に東独で「生活していたので、この時代に対してこの映画の中の重要な人々の間のある感情を私も持っている」。この映画では、「彼らが、彼らの相互関係や芸術・国家・シュタジとの関係の中で非常に正確にかつ思いやり深く記述されていた。私はこの映画が制作されることが重要だと思った」。

〔脚本へのミューエの共感はシュタジの描写ではなく、「映画の中の重要な人々」、つまり独裁下の芸術家やジャーナリストなどの相互や芸術・国家・シュタジとの関係の描写にあった。青木（2020b:2・10・14・15 節）も同様である。宣伝に囚われなければ、大方は同じ印象を持つと思う。〕

●幻影痛（Phantomschmerz）とヴィースラー

「壁が崩壊した時私は 36 才だった」。だから「この小さな国で実際に何が起こったのかを理解することは私にとって内なる関心事である」。しかしそれは「オスタルギーとは何の関係もない」。

私は DDR〔東独〕史を「自ら体験した」〔但し東独史のうちいわゆるベルリン暴動は生まれる直前であった〕が、DDR は「滅亡した」。「この幻影痛はなるほど年々ますます弱まるが、しかしいまだに感じられ得る。そこには、このシュタジ大尉ヴィースラーような非常に首尾一貫した人物像の身になって考え、感じ取ることへの関心も含まれる」。

〔本稿は前稿（青木 2020b）同様にこの映画の中で改心したのは宣伝と異なりドライマンとクリスタであって、ヴィースラーは終始一貫していることを強調している。ヴィースラーを演じたミューエのこの言明は私見を裏付ける。〕

●＜あなたは役作りに自分の体験に頼ったか？＞

「私は DDR で育ち、そこでしたいことをすることさえ許された：私はいつも俳優になりたいと思っていたし、非常に著名な場所でそうなることができた」。だから私は「シュタジまたは DDR の専横の犠牲者ではなかった」。

「しかし私は他のすべての人のように、シュタジのために働く人々がたくさんいることやどの企業・施設にも 1 人ずつシュタジ将校がいることを知っていた」。シュタジとその協力者が「我々を監視し、聞き耳を立て、パーティーに来ることを知っていた。そうしたことは常に全く普通の生活の一部であった。監視されている場合には電話に雑音が入ることも普通であった。だから私はこの映画のために特に調べることはなかった」。脚本と監督が「素晴らしい状況を提供」した。

●ミューエを担当した IM

＜撮影直前にアンディを姓で呼ぶ提案が出た時、ミューエは「ファルケナウ」という姓を提案し「そこにファルケナウがいる！」と言った。この姓は「あなたにあてがわれた IM の一人」だったそうだが、「ドイツ劇場の俳優だったのか？[22]＞

「私のシュタジ文書によると、私には 4 人の IM がいて」、うち本名が分ったのはファルケナウ（Günther Falkenau）とグラス（Johanna Glas）である。前者は「アシスタントディレクター」で、後者は同僚の女優だったが、1990 年にドイツ劇場を去った。この二人を IM とは疑っていなかったが、判明後も彼らに問いただそうとは思わなかった。それは同情の気持ちに加えて、彼らの密告の「私の人生」への実際の影響がなかったからでもある。

「しかしもちろん〔同文書には〕私が驚いた点も多くあった」。例えばすでに大学在学中から情報が集められていた。

＜もっと早くからではないか？＞「そうだ」、〔高卒直後の〕兵役期間中に、兵役での「私の困難をある友人宛てにぶちまけた手紙」を「兵舎外で秘密裏に村の郵便ポストに投函した」が、「30 年後に私のシュタジ文書の中にこの手紙を見つけた。それは決して届かなかったのだ」。

「私にとって軍隊時代は複雑だった」。「すべてが好きではなく、それに耐えられず、その後胃を患い、胃潰瘍になった」。しかし仮病と見られ、ようやくレントゲン撮影された時には「非常に多くの潰瘍が確認され」手術を受け、「もはや全く戦闘能力を失った」。これらもその手紙に書いた。

●高校時代を一変させた兵役体験

高校（アビツーア）時代には「私は素晴らしい友人グループを持っていた」。そこで「ヴォルフ（Christa Wolf）やブラウン（Volker Braun）、ミュラー（Heiner Müller）を読み始め」、「手から手へと広まったビアマン（Wolf Biermann）の二三の青写真[23]を持っていた」。

「アビツーア後すぐ」の兵役では「非常に多数の人々と非常に密接に一緒にいなければならない」が、「私は非常に打ち解けやすいわけではない」上に、「これらの人々はまさに非常に愚かであった。それはとてもつらいことだった」。「そのことはとてつもなく私を侮辱した」。

〔東独では 10 年制義務教育（日本の高 1 まで相当、但し一部は 8 年で修了）のあと大部分が職業学校に入り、一部のみ大学進学コースを経て大学に進んだ。従って大学卒と大部分の若者の間の一般教育格差が大きかった（東独の大学進学率は本節末尾の**補足**参照）。しかし彼の「こ

[21] その初版（2006 年）では彼はグレルマンを IM だったと非難した。彼女が非難不当と裁判に訴え勝訴し、未配本では該当部分黒塗り、その後の版では削除となった（詳細は青木 2021c）。手元にあるのは 2007 年版のため以下では該当部分を紹介し得ない。

[22] アンディ（Andi Wenzke-Falkenau）はシュタジのジャーナリスト・ハウザーへの作戦担当者で、脚本では彼を劇場で見つけたヴィースラーが「アンディがいる！」と言う（青木 2020b:7）。撮影では「ファルケナウがいる！」となったが、上映版では削除された。

[23] 東独でタイプライターによるカーボンコピーとしても出回ったビアマン作品の写真が青木（2020a:17）にもある。

れらの人々」への一律軽蔑こそ「侮辱」であった。〕

＜国境守備隊にいたのでは？＞「そうだ」。そこで「私は巨大な兵舎があったシェーネヴァイデ〔東ベルリン南部〕に入れられた」ことも負担だった。そこには「直径 16cm または 18cm」の榴弾砲があり、あとで知ったところでは、それらはポツダム協定違反であった。それらを「砂の中に」埋め、また掘り出す作業を繰り返すという「不条理な活動に慣れた」。

半年後国境に移動となり、胃潰瘍になるまで「私は国境に立ち国境〔監視〕シフトを遂行した」。

＜「あなたは国境逃亡者を射撃するという任務をもってそこに立ったか？＞「そうだ。実弾 60 発を持って。つねに、毎日異なる国境兵と二人で、毎日異なる国境歩哨所へ」。

＜なぜ？＞「他の兵士たちと密に接触」しないように、だ。「8 時間も一緒にそこに坐った」のだから、「何日か続けて」そうすれば、個人的に親しくなるだろうから、「それは避けられねばならなかった」。

毎日同じ歩哨所の当番では様子を研究の上〔逃亡の〕アイディアに到る可能性があったため、日々別の所になった。

＜国境での射撃命令をどう思ったか？＞「なんらかの行動を予め考えねばならなかった」。「私の行動は〔逃亡者から〕狙いを外すことだった。人を目がけてではなく国境に沿って射撃することだった」。その結果は刑務所および進学不可能だっただろう。

将校は射撃について次のように我々を「教化した」：本当に逃亡したい人は「東ベルリンの壁を選択しない」。「それは非常によく守られている」からだ。そこを突破しようとするのは「酔っ払いか、人生に終止符を打ちたい絶望した人たち」だから、そういう人たちは自分の「生活と将来を犠牲」にする〔=射撃しない〕ことに値しない。

〔1961-89 年の壁死者のリストと各死亡状況は Hertle（2017）や同（2017a）を、それらからの集計表は青木（2018a:5）参照。突破の試みが多いが、酔っ払いや自殺と見られる事例もあった。逃亡を試みた国境兵も 8 人死亡した。大きな話題となった壁でのギュフロイ射殺やショッセー通り検問所逃亡未遂事件は青木（2018a、2018b）参照。〕

●少年ミューエの「体制との取り組み」

＜「国境に立つ瞬間にはその体制と取り組まねばならない」が、それは「あなたの DDR との関係を変えたか？」＞

体制との「取り組みにおいて国境は一種の頂点であった」が、取り組みはすでに「初等学校〔10 年制〕で始まった。そこで我々は 2 つの言語に対処することを学んだ。すなわち家では学校とは異なって話した。それはシームレスに機能し、十分身につけられた。我々は家で西のテレビを見るが、学校ではそれを誰も知ってはならなかった」。

〔西のテレビを見るアンテナ潰しキャンペーンもあったが、実効性はなく、ホーネッカーも 1973 年 5 月 28 日の SED 第 9 回中央委で、西独のラジオ・テレビを「我々のところでは誰もが好きなように付けたり消したりすることができる」（Honecker 1975:235）と報告し、公認した。それはミューエ 20 才誕生日直前のことである。〕

父は仕事で「年に 2 回パリに行くことを許され、我々にジーンズを買ってきた。それらは 1960 年代にはまだ学校では着用が許されなかった。だから我々は帰宅後に着替えた。我々は“そもそもなぜそうするのか？”と毎日自問することもなかった」。

●「共和国逃亡」

＜「あなたにとって共和国逃亡は間違ったこと、犯罪だったのか？」＞〔「共和国逃亡」は非合法国境越えを指す東独当局の用語。〕

「私はこの国家によって形成され」、「この教育制度全体を修了し、それを非常に集中的に受け入れ、常に我々の体制がより良い」と思っていた。だから「共和国逃亡は私にとってテーマではなかった」。西へ去るのは「老人だけに違いない」、我々は「若干の進路を変えねばならないが、しかし資本主義は相変わらずそれ以前の体制段階にあり、あらゆる所で不正と貨幣の支配を抱えている、等々」と考えた。

「学校で長年明けても暮れても」教えられたことは、「すべてなんとなく非常に納得がいった」。

「あなた方は、我々にとって歴史は科学であったということを忘れるべきではない」。すなわち、資本主義の次に社会主義、さらに共産主義が来るのであり、「資本主義は我々より遅れている。喜ぼう！もちろん我々は問題を抱えているが、まだゴールにはいない」〔と思っていた〕。

「突然〔1990 年〕看板がもはや Konsum〔東独の消費協同組合〕でも HO〔東独の国営商店〕でもなく、肉屋マイスター・シュルツェ〔という私営〕となった時、私はにやりとして考えた：“見ろ、我々はみな再び一歩〔資本主義に〕戻った”」。

〔但し東独は共産圏の中で例外的に多くの私営（小規模企業や商店、サービス業）が存続していた。むろん計画経済に組み入れられ、各種規制のもとにあったが、それでもサービス精神が国営とは異なった（簡略には青木 1991:第 3 章、より詳しくは青木 1985;1985a）。〕

●＜DDR 時代に独裁と感じたことがあるか？＞

「公式には“プロレタリアートの独裁”と呼ばれた」が、「私は実際にそう考えたこともそう定式化したこともない」。「それは私の頭の中ではピノチェトあるいはポルポトの独裁と同義ではなかった」。

「しかし今では私はいつもこの言葉〔独裁〕を使う」。というのは、流血の惨事がそれらほどではなかったとしても、「同様に DDR でも、個人とその権利ではなく、住民の負担での権力の組織や禁止、イデオロギーの実現が重要であったということをはっきりと言わねばならないからである」。

＜「今あなたは DDR の恣意性の犠牲者ではなかった」と言ったが、撮影中にあなたは予備役召集に関連して「危険な警告を受けた」と語った。それを説明してほしい。＞

「その日は恐ろしかった」。しかし私は「体制の中で本当に苦しんだ人々と自分を同等に扱おうとするのだろうと疑われたくはない。…私が経験したことは、他の多くの人の経験との比較ではくだらないものだ」。私は「〔体制の〕批判的な随行者であったが、それでも日当たりの良い側にいた」。

〔このようにミューエは回答を断ったが、聞き手から、彼の経験が「それほど極端ではなく、従ってあまり代表的でないからこそ、我々には興味深い」と促され、以下を語る。〕

1986 年に映画「蜘蛛の巣」（Das Spinnennetz、監督 Bernhard Wicki）[24]の西ベルリンでの撮影のための就労ビザを入手し、それを利用して「西の劇場や映画館に行った

[24] 原作は Joseph Roth、邦訳はロート（2013）所収。この映画でミューエは少尉ローゼ（Theodor Lohse）を演じた。

り、あるいは友人たちと会ったりした」。それをシュタジが知り、私は予備役召集のための召喚状を受け取った。ちょうどドイツ劇場でも「次々と主役を演じ」、「飛躍の最中」にあった。

召集検査では医師に「私は胃の手術を受けた、再び制服を着ないだろう。私はやらない。私はできない。どんなことがあってもやらない」と言ったが、彼は短い診察後、「私を兵役適格と書いた」。

それでも召集委員会（将校 5 人）との面談では「私は彼らに軍隊に戻らないだろう、私はそれをできないと言った」。すると彼らは、ドイツ劇場出演は拒否理由にならず、「私はすぐに逮捕され得る」などと脅し、「国家のおかげ」に対して「国家に何かを返さねばならない」と言った。

「私は“私はそれをしない、私はそれをしない、私はそれをしない”とだけ繰り返しつつ、「“彼らの前で泣くな！彼らを喜ばせるな”とのみ考えた」。「私は中庭に出て、すぐ隅に潜り込み、大声で泣きわめき、わあわあ泣いた」、「内なる怒りが残った。私はとてもショックを受け、同時にとても無力に感じた」。〔そのあと席に戻ったようで〕彼らは「私の劇場および私の上司に連絡する」が、「次の週に再び出頭命令を受け取ることを覚悟」せよと言った。

家に戻って〔就労ビザ利用の出国のため〕旅券を持ってドイツ劇場へ行き、「私の総監督」ディーター・マン（Dieter Mann）に「ディーター、彼らはたった今 1 時間以上私を拘束して脅し、私が軍隊に入り予備役奉仕をすることを望んだ。不安がすぐに終わらないなら、私は旅券を持ってハイネ通り〔検問所〕へ行く。そしてそのあと私はいなくなる。そうなれば君たちは私に二度と会わない」と言った。

すると彼は、「落ち着け。私に二三電話をさせろ」と答え、10 分後にオフィスから戻り、「うまくいった、君はこれ以上そこから何も言われることはないだろう」と言った。〔ハイネ通り国境検問所（Grenzübergang Heinrich-Heine-Straße）は両独市民と外交官向けであった（Lapp 2013:503）。〕

この話題は「もちろんすべて、あなたのさっきの質問に立ち戻るため」であり、「総監督は単に、〔彼らに〕“その男〔ミューエ〕を放っとけ、彼は明日演じなければならない”と言っただけである」。「これはすべて独裁である」。

●＜「あなたは DDR 時代に体制に対して反抗したくなったか？」＞

「ごくわずかのみだ。私は英雄ではなかった」が、「1976 年〔11 月〕にビアマンが追放された時、私は一度全く小さな試みをした。その時私は大学 1 年生だった」。

「追放直後に芸術家たち…による大きな共感と連帯の波が起こったので、私は私の学年の中で連帯声明に署名させようとした。そこで私は、“我々ライプツィヒ演劇学校の学生は、ヴォルフ・ビアマン追放に抗議し、この措置の再考を求める”という文章を作成し」、学生仲間に署名させた。

だが翌日「ドラマ科（Sektion Schauspiel）の私の部長」が、「君に 1 つの歴史を聞かせたい」、「我々学生たち」は 1968 年〔8 月〕に「プラハへの社会主義兄弟諸国軍進駐はおかしいと考えた」が、「学年全体が解散させられ、すべての男子が軍隊に、すべての女子が生産現場へ行った。まあよく考えろ」と電話してきた。

「かくてこの年のための私の異論派活動は終わった」。

〔補足：東独の大学進学率試算〕

東独の大学進学率を試算したい（東独の学校制度については青木 2019：図 13 参照）。

10 年制義務教育を終えると（一部 8 年修了。10 年修了率は 1975 年 78%から 1988 年 89%まで改善）、アビツーア（高校）か職業学校に入り、職業学校の一部に進学クラス（アビツーア）付きがあった。1975-1988 年各年には、①大学入学者（高校または進学クラス付き職業教育出身）は僅かな変動のみで、平均約 3.2 万人である。同じく、②進学クラス付きを除く職業学校入学者は漸減傾向で、平均約 19.3 万人である。①と②の合計に占める①の比率を大学進学率とすると、約 16％にすぎない（東独統計年鑑 1989:307,312,313 から計算）。

ホーネッカーの妻で国民教育相だったマーゴットはホーネッカー随行の訪日（1981 年）前に彼女に提出された日本の教育事情報告書を見てその高校進学率の高さに驚き、資本主義にはあり得ない、「でたらめだ」と言って却下した（青木 1991:76-77、ツィッタウでの関係者情報）。この映画には彼女の名もドライマンの友人として登場する。家宅捜索で発見した「ソリジェニーツィンの本」（『煉獄の中で』の西独版）は「マーゴット・ホーネッカーからのプレゼントだ」と言われたシュタジは「不安になる」（青木 2020b:16,21）。

通常大学進学希望者は、ミューエ同様、事前に 3 年の兵役を終えねばならなかった。従って同年輩の徴兵の中の学卒比重は男子大学進学率よりも高かったと思われる。また武器回避のための「建設兵士」制度が作られたが、進学のためには不可能であった。

表 4 登場人物（姓五十音順、太字が中心人物、ハウザーおじとヘッセンシュタイン以外は東独市民。()内は俳優）

イェルスカ、アルバート	Albert Jerska (Volkmar Kleinert)	ドライマンが敬愛する演出家。ドライマンに「善き人のソナタ」（邦画では「善き人のためのソナタ」）を贈る。7 年来の演出家としての職業禁止に苦悩し、脚本では 1984 年 12 月 4 日、上映版では翌年 1 月 5 日に首吊り自殺。シュタジの OV「ジムシ」（Engerling）の対象。
ヴァルナー、カール	Karl Wallner (Matthias Brenner)	パウル・ハウザーの友人。
ヴィースラー、ゲルト	Gerd Wiesler (Ulrich Mühe)	主役：シュタジ第 XX/7 部大尉。党（SED）とシュタジの理念を信じる几帳面なシュタジ。文化相と上司第 XX/7 部長の堕落に怒り。略称「HGW」。
ヴェンツケ・ファルケナウ、**アンディ**	Andi Wenzke-Falkenau (Jens Wassermann)	ヴィースラーのシュタジ同僚、パウル・ハウザーに対する OV 担当だが、うまくいかず左遷の危機。別名「ロロフ」（Rolf）。
グルビッツ、アントン	Anton Grubitz (Ulrich Tukur)	シュタジ本部第 XX/7 部長・中佐・同法科大学教授。手段を選ばない出世主義者。当時の実際の第 XX/7 部長ブロシェ（Karl Brosche）も中佐。

シュヴァルバー、エゴン	Egon Schwalber (Hubertus Hartmann)	ドライマン作の映画内演劇「愛の諸相」の演出家。シュタジの密告者(IM=非公式協力者)「ラインハルト」(Max Reinhardt)でもある。
シュティグラー、アクセル	Axel Stigler (Hinnerk Schönemann)	シュタジ少尉。ホーネッカー風刺小話をシュタジ食堂で話題にしたためグルビッツに郵便開封係へ左遷され、のちにヴィースラーもそこに左遷。
ジーラント、**クリスタ**・マリア	Christa-Maria Sieland (Martina Gedeck)	女優、ドライマンと同棲、上記演劇の主役、一時ヘムプフに「身を売る」が、ヴィースラーの説得で関係を断つ。ヘムプフが彼女の覚醒剤入手先を突き止めてシュタジに逮捕させ、グルビッツが彼女をドライマンに対する IM に仕立て、最後はトラックに飛び込み自殺する。別名「CMS」。
ドライマン、ゲオルク	Georg Dreyman (Sebastian Koch)	劇作家、シュタジの OV「ラツロ」(Lazlo、邦画ではラズロ)の対象。国家賞受賞、ホーネッカー夫人・国民教育相マーゴットの友人という設定。ヴィースローは初対面の際に彼を「国家の敵」と同様の「横柄なタイプ」と見なす。ラツロはドライマンの別名でもある。
ノヴァック	Nowack (Thomas Arnold)	ヘムプフの助手兼運転手。クリスタの覚醒剤入手先を突き止める。〔単なる運転手ではなく、その行動・目つきはたぶん元シュタジ。〕
ハウザー、パウル	Paul Hauser (Hans-Uwe Bauer)	ドライマンの友人。元は演劇担当、今は農業担当に替えられた反体制的ジャーナリスト。OV 対象者だが、「抜け目のない奴」(グルビッツ)で有罪を免れている。フランクの甥。本文では単にハウザーと記載
ハウザー(おじ)、フランク	Frank Hauser (Paul Fassnacht)	パウルのおじ、西ベルリンからメルツェデスで毎週パウルを訪問。ドライマン宅の盗聴有無を試する芝居に協力。本文では「ハウザーおじ」と記載。
ヘッセンシュタイン、グレゴール	Gregor Hessenstein (Herbert Knaup)	西独週刊誌シュピーゲル編集委員。ハウザーがドライマンに紹介。ドライマンの寄稿がシュタジにばれないよう小型タイプライターを提供。
ヘムプフ、ブルノ	Bruno Hempf (Thomas Thieme)	文化相、かつてシュタジ幹部として演劇分野の浄化に功績。クリスタに横恋慕し、恋敵ドライマン宅の監視、自分から離れたクリスタの処分をグルビッツに命令。
ボールを持った少年	氏名不詳 (Paul Maximilian Schüller)	この少年に「シュターージか」と聞かれたヴィースラーはむっとして父親の名を知ろうとするが、思いとどまり、少年に「悪い男じゃない」と言われる。
マイネケ夫人	Frau Meineke (Marie Gruber)	ドライマンの隣室の未亡人。ドライマンの留守宅を出入りするシュタジ集団を目撃するが、脅されて沈黙。沈黙の礼にシュタジがサボテンを贈る。
ライエ、**ウド**	Udo Leye (Charly Hübner)	曹長(邦画では軍曹)、ヴィースラーと 12 時間交替の盗聴勤務。こだわりのない若者。映画ではそうした若いシュタジが何人も登場。

(出所)青木(2020a:2)から再録(脚本(Donnersmarck 2007: 9-161)と上映版字幕(同前:159)による)。

略語

シュタジ = Stasi、東独国家保安省(MfS)またはその職員の略称。東独時代にはシュターージ(Staasi)とも略称された。この映画の上映版では少年が「シュターージ」と長く伸ばす。

西独 = Bundesrepublik Deutschland、ドイツ連邦共和国。略称 BRD。西独側は東独を DDR と呼んだが、自国は BRD ではなく Bundesrepublik と略し、東独側は両者に略称を使用した

西独統計年鑑 = Statistisches Jahrbuch für die Bundesrepublik Deutschland

東独 = ドイツのソ連占領地区(1945-1949 年)・ドイツ民主共和国(1949-1990 年)の略称。DDR に相当

東独統計年鑑 = Statistisches Jahrbuch der DDR

bpb = Bundeszentrale für politische Bildung、連邦政治教育センター(西独・統一ドイツ内務省管轄)

BStU = Die Bundesbeauftragte für die Unterlagen des Staatssicherheitsdienstes der ehemaligen DDR、旧 DDR シュタジ文書連邦保管庁。但しシュタジ文書は 2021 年 6 月 17 日に連邦公文書館に移管された(研究機能を含む)。

DAAD = Deutscher Akademischer Austauschdienst、ドイツ学術交流会

DDR = Deutsche Demokratische Republik の略、ドイツ民主共和国(東独)のドイツ語略称

GDR = German Democratic Republic の略、東独の英語略称

HA = Hauptabteilung、局(シュタジの国家保安相または同代理に直属する最上位職務単位で、その中に部(Abteilung)やグループなどがあり、部の中に課(Referat)があった)

HO = Handelsorganisation、商業組織(東独の国営小売り商業組織)

IM = Inoffizieller Mitarbeiter、非公式協力者(シュタジに協力した密告者で、秘密工作や暗殺に関わったこともある)

Konsum = 消費、ここでは東独消費協同組合の商標を指す

MfS = Ministerium für Staatssicherheit、国家保安省(シュタジの本部)

OV = Operativer Vorgang(作戦事案)、シュタジの用語

OV 規定 = シュタジの「作戦事案の発展と処理についての方針 1/76」(Richtlinie 1/76)。1976 年 1 月 1 日発効

PGH = Produktionsgenossenschaft des Handwerks、手工業生産協同組合(東独 1952-1990 年)

SED = Sozialistische Einheitspartei Deutschlands(ドイツ社会主義統一党)、その後 PDS(Partei des Demokratischen Sozialismus、民主社会主義党)を経て左翼党(Die Linke)

SSEES = School of Slavonic and East European Studies

UCL = University College London

ZOV = Zentraler Operativer Vorgang、中央作戦事案、シュタジの用語

引用文献(本文中の URL および統計年鑑を除く)

青木國彦（1985）社会主義計画経済体制と私的営業、東北大学『研究年報経済学』46-4、in: http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/gsk.html
-----（1985a）社会主義における余剰・不足と私的営業、東北大学『研究年報経済学』156 号、in: 同上 URL
-----（1991）『壁を開いたのは誰か』化学工業日報社
-----（2005）「プラハの春」の東独波及とポーランドからチェコへの連帯クーリエ：ヘルシンキ宣言からベルリンの壁開放へ(1)、『カオスとロゴス』26、in: 同前 URL
-----（2014）東独イェーナの白いサークルによる沈黙円陣（1983年）：CSCE マドリッド会議閉幕を前に、『東京国際大学論叢経済学部編』第 50 号、in: 同上 URL
-----（2018）ケネディのベルリン演説（1963 年 6 月）再考、東北大学『研究年報経済学』76-1、in: 同上 URL
-----（2018a）ベルリンの壁最後の射殺ギュフロイ事件（1989年2月）の詳細とその意味：「1988年12月にホーネッカーが射撃命令を制限」（東独少尉ハンフ法廷証言）の真偽、『社会主義体制史研究』3、in: http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm
-----（2018b）東独国境の射撃停止命令（1989年4月3日）の混乱とハンガリー国境フェンス撤去：ベルリンの壁ショッセー通り検問所事件の支配党への衝撃、『社会主義体制史研究』5、in: 同上URL
----（2019）1973 年第10 回世界青年学生祭典（東ベルリン）に見る自由化百景：東独ホーネッカー政権初期の「自由化」について (1)、『社会主義体制史研究』10、in: 同上URL
-----（2020）東独文化政策の規制と緩和（1963-1976 年）：東独ホーネッカー政権初期の自由化について(2)、『社会主義体制史研究』12、in: 同上URL
-----（2020a）アンソロジー「ベルリン物語」をめぐる東独作家たちの野望とシュタジの陰謀：東独ホーネッカー政権初期の自由化について(3)、『社会主義体制史研究』13、in: 同上URL
-----（2020b）脚本に見るドイツ映画「善き人のためのソナタ」（原題「他人の生活」）(1)：宣伝と実際、『社会主義体制史研究』14、in: 同上URL
-----（2021）東独における職業禁止と自由業：ドイツ映画「善き人のためのソナタ」に関連して、『社会主義体制史研究』19（予定）、in: 同上URL
-----（2021a）東独職業禁止に対する演出家クリーア・人気歌手クラウチクの闘い：ドイツ映画「善き人のためのソナタ」に関連して、『社会主義体制史研究』20（予定）、in: 同上 URL
-----（2021b）シュタジ（東独秘密警察）の作戦規定と組織：ドイツ映画「善き人のためのソナタ」に関連して、『社会主義体制史研究』21（予定）、in: 同上 URL
-----（2021c）東独秘密警察をめぐる女優グレルマンと元夫・俳優ミューエの争い：ドイツ映画「善き人のためのソナタ」に関連して、『社会主義体制史研究』22（予定）、in: 同上 URL
グラスホフ論文 = Graschoff (2019)
クンツェ、ライナー（山下公子訳1992）『暗号名「叙情詩」〔OV「抒情詩」を指す〕、草思社
警察庁生活安全局生活安全企画課 2009、『平成 20 年中における自殺の概要資料』
厚生労働省（2020）『令和 2 年版自殺対策白書』
野村修（1986）『ビーアマンは歌う』品文社
ビーアマン（野村修訳1972）『ヴォルフ・ビーアマン詩集』品文社
ヤング論文 = Young (2014)
ロート、ヨーゼフ（池内紀訳 2013）『聖なる酔っぱらいの伝説他四篇』岩波文庫
Badenberg, Christiane (2010) Die Zahl der Suizide war ein Politikum, in: https://www.aerztezeitung.de/Politik/Die-Zahl-der-Suizide-war-ein-Politikum-221544.html
Baumgartner, Gabriele u. D. Hebig (Hg.)(1996) *Biographisches Handbuch der SBZ/DDR 1945-1990*, K.G. Saur.
Biermann, Wolf (22.03.2006) Die Gespenster treten aus dem Schatten, in: *Die Welt* https://www.welt.de/print-welt/article205348/
bpb (Hg.) (2006) *Filmheft: Das Leben der Anderen*, in: https://www.bpb.de/system/files/pdf/NSUEAK.pdf
BStU (Hg.) (2015) *Abkürzungsverzeichnis*, BStU.
Donnersmarck, Florian Henckel von (2006) *Das Leben der anderen: Filmbuch*, Suhrkamp.
----- (2007) *Das Leben der anderen: Filmbuch*, Suhrkamp.
Engelmann, Roger (1994) *Zu Struktur, Charakter und Bedeutung der Unterlagen der Staatssicherheit,* BStU.
Finger, Evelyn (2006) "Das Leben der Anderen": Die Bekehrung, in: *Die Zeit*, Nr.13 (23.03.2006).
French, Philip (15 Apr 2007) The Lives of Others, in: https://www.theguardian.com/film/2007/apr/15/thriller.worldcinema
Funder, Anna (2003) *Stasiland: Stories From Behind the Berlin Wall*, Granta; (2006 H. Riemann訳) *Stasiland*, Fischer Taschenbuch. ファンダー（伊達淳訳）『監視国家：東ドイツ秘密警察に引き裂かれた絆』白水社2005
----- (5 May 2007) Tyranny of terror, in: https://www.theguardian.com/books/2007/may/05/featuresreviews.guardianreview12
Gieseke, Jens (2000) *Die hauptamtlichen Mitarbeiter der Staatssicherheit: Personalstruktur und Lebenswelt 1950-1989/90*, Ch. Links.
----- (2006) *Der Mielke-Konzern: Die Geschichte der Stasi 1945-1990, Erweiterte und aktualisierte Neuausgabe*, DVA.
----- (2008) Stasi Goes to Hollywood: Donnersmarcks The Lives of Others und die Grenzen der Authentizität, in: *German studies review*, Jg. 31, Nr.3.
----- (2011) *Die Stasi 1945-1990*, Pantheon.
Gorki, Maxim (1924) Ein Mensch: Erinnerungen an Lenin, *Die Neue Rundschau*, XXV. Jg., Band 2, S. Fischer.
Grashoff, Udo (2015) Suizide in Haftanstalten: Legenden und Fakten, in: Deutschland Archiv, 10.9.2015, https://www.bpb.de/211769
----- (2019) Driven into Suicide by the East German Regime?: Reflections on the Persistence of a Misleading Perception, *Central European History* 52, in: https://www.researchgate.net/publication/334191615
Hertle, Hans-Hermann; Maria Nooke (Hg.) (2017) 140 Todesopfer an der Berliner Mauer 1961-1989, in: https://www.berliner-mauer-gedenkstaette.de/de/uploads/todesopfer_dokumente/140_todesopfer_an_der_berliner_mauer_1961_1989.pdf
-----(2017a) Die Todesopfer an der Berliner Mauer 1961-1989,in: https://www.berliner-mauer-gedenkstaette.de/de/uploads/todesopfer_dokumente/2017_08_08_hertle_nooke_berliner_mauer_todesopfer.pdf
Honecker, Erich (1975) *Reden und Aufsätze*, Bd2, Dietz.
Jäckel, Hartmut (1980) *Ein Marxist in der DDR: Für Robert Havemann*, Piper.
Lapp, Peter Joachim (2013) *Grenzregime der DDR*, Helios.
Lindenberger, Thomas (2008) Stasiploitation - Why Not?: The Scriptwriter's Historical Creativity in The Lives of Others, in: *German studies review*, Jg. 31, Nr.3.
Löser, Claus (2006) Wenn Spitzel zu sehr lieben, in: *taz*, 22.03. 2006
Müller-Enbergs, Helmut u.a. (Hg.) (2010), *Wer war wer in der DDR*, Ch. Links.
Neubert, Ehrhart (1998) *Geschichte der Oppositon in der DDR 1949-1989*, 2., durchgesehene und erweiterte Auflage, Ch. Links
Osang, Alexander (2007) Oscars: Das Leben neben dem anderen, in: *Der Spiegel*, H.10.
Plenzdorf, Ulrich; K. Schlesinger; M. Stade (1995)

Ber-liner Geschichten, »Operativer Schwerpunkt Selbst-verlag«: Eine Autoren-Anthologie: wie sie entstand und von der Stasi verhindert wurde, Suhrkamp.

Richtlinie 1/76 zur Entwicklung und Bearbeitung Opera-tiver Vorgänge (OV) (01.01.1976), BStU MfS AGM 198.

Schubbe, Elimar (Hg.)(1972) *Dokumente zur Kunst-, Literatur- und Kulturpolitik der SED*, Seewald.

Schulz, Werner (25.02.2007) "Das Leben der anderen" hat keinen Preis verdient, in: *Die Welt* https://www.welt.de/politik/article734960/

SED (Hg.) (1969) *Polilische Ökonomie des Sozialismus und ihre Anwendung in der DDR*, Dietz. 向坂逸郎監訳(1972)『社会主義経済学:ドイツ民主共和国における理論と実践』上下、河出書房新社

Stiftung Haus der Geschichte der Bundesrepublik Deutschland u. Zeitgeschichtliches Forum Leipzig (Hg.) (2001) *Einsichten: Diktatur und Widerstand in der DDR*, Reclam Leipzig

Suckut, Siegfried (Hg.)(1996) *Das Wörterbuch der Staatssicherheit: Definitionen zur »politisch-opera-iven Arbeit«*, 2., durchgesehene Auflage (Analysen und Dokumente Bd. 5), Ch. Links

Walther, Joachim (1996) *Sicherungsbereich Literatur: Schriftsteller und Staatssicherheit in der Deutschen Demokratischen Republik*, Ch. Links.

Young, Sarah J (2014) 'The Death of Others': the myth and reality of suicide in the German Democratic Republic, in: SSEES Research blog. (https://blogs.ucl.ac.uk/ssees/2014/11/27/the-death-of-others-the-myth-and-reality-of-suicide-in-the-german-democratic-republic/)

―― 『社会主義体制史研究』近刊予定・既刊 ――

in: http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm

―― 近刊予定 ――

No. 22 (Aug. 2021)

青木國彦

東独秘密警察密告をめぐる女優グレルマンと元夫・俳優ミューエの争い:ドイツ映画「善き人のためのソナタ」に関連して

Kunihiko AOKI

Der Streit Jenny Gröllmanns mit dem Ex-Ehemann Ulrich Mühe um die Stasi-IM "Jeanne": Im Zusammenhang mit dem Film "Das Leben der anderen"

No. 21 (Aug. 2021)(予定)

青木國彦

シュタジ(東独秘密警察)の作戦規定と組織:ドイツ映画「善き人のためのソナタ」に関連して

Kunihiko AOKI

Operative Bestimmungen und Organisationen der Stasi in der DDR: Im Zusammenhang mit dem Film "Das Leben der anderen"

No. 20 (Aug. 2021)(予定)

青木國彦

東独職業禁止に対する演出家クリーアとその夫シンガーソングライター・クラウチクの闘い:ドイツ映画「善き人のためのソナタ」に関連して

Kunihiko AOKI

Widerstand Freya Kliers und Stephan Krawczyks gegen dem Berufsverbot in der DDR: Im Zusammenhang mit dem Film "Das Leben der anderen"

No. 19 (Aug. 2021)(予定)

青木國彦

東独における職業禁止と自由業:ドイツ映画「善き人のためのソナタ」に関連して

Kunihiko AOKI

Der Berufsverbot und die Freiberufler in der DDR: Im Zusammenhang mit dem Film "Das Leben der anderen"

―― 既刊 ――

No. 18 (Aug. 2021)(本号)

青木國彦

脚本に見るドイツ映画「善き人のためのソナタ」(原題「他人の生活」)(2):批評の批評

Kunihiko AOKI

"Das Leben der anderen" im Filmbuch von F. H. von Donnersmarck (2): Rezension der Rezensionen

No. 17 (February 2021)

Yoji Koyama

Germany: Core of EU-Visegrad Economic Relations

No. 16 (December 2020)

Yoji Koyama

Political Economy of the Baltic States

No. 15 (December 2020)

Yoji Koyama

Slovenia: the Best Performer of the Former Yugoslavia

No. 14 (December 2020)

青木國彦

脚本に見るドイツ映画「善き人のためのソナタ」(原題「他人の生活」)(1):宣伝と実際

Kunihiko AOKI

"Das Leben der anderen" im Filmbuch von F. H. von Donnersmarck (1): Werbung und Wirklichkeit

No. 13 (June 2020)

青木國彦

アンソロジー「ベルリン物語」をめぐる東独作家たちの野望とシュタジの陰謀:東独ホーネッカー政権初期の自由化について(3)

Kunihiko AOKI

Die heimliche Kämpfe um die Anthologie »Berliner Geschichten« in der DDR: Über Honeckers „Liberalisie-rung" (1971-75) in der DDR (3)

No. 12 (Feb. 2020)

青木國彦

東独文化政策の規制と緩和(1963-1976 年)ー東独ホーネッカー政権初期の「自由化」について (2)ー

Kunihiko AOKI
Die schwankende Kulturpolitik in der DDR (1963-76): Über Honeckers „Liberalisierung“ (1971-75) in der DDR (2)

No. 11 (Nov. 2019)

Yoji Koyama
Emigration from Lithuania and Its Depopulation

No. 10 (Sep. 2019)

青木國彦
1973 年第 10 回世界青年学生祭典（東ベルリン）に見る自由化百景－東独ホーネッカー政権初期の「自由化」について (1)－

Kunihiko AOKI
Hundert Ansichten der X. Weltfestspiele der Jugend (Os-tberlin, 1973): Über Honeckers „Liberalisierung “ (1971-75) in der DDR (1)

No. 9 (Aug. 2019)

青木國彦
東独通貨マルクの対外関係： 最低交換義務、公式・ヤミレート、末期状況

Kunihiko AOKI
Auswärtige Beziehungen der DDR-Mark: Das Mindestum-tausch, die Kurse und die letzte Zustände

No. 8 (June 2019)

青木國彦
東独通貨マルクのヤミレートの暴落（1987 年 1 月）

Kunihiko AOKI
Der inoffizielle Kurs der DDR-Mark purzelte dramatisch (Jan. 1987)

No. 7 (May 2019)

Yoji Koyama
Emigration from Romania and Its Depopulation

No. 6 (Jan. 2019)

青木國彦
ケネディのベルリン演説（1963 年 6 月）再考： ブラント東方政策との比較

Kunihiko AOKI
A Rethinking of J. F. Kennedy’s Address at the West Berlin Town Hall (June 26, 1963): In comparison to the “New Ostpolitik” of Willy Brand

No. 5 (Dec. 2018)

青木國彦
東独国境の射撃停止命令（1989 年 4 月 3 日）の混乱とハンガリー国境フェンス撤去：ベルリンの壁ショッセー通り検問所事件の支配党への衝撃

Kunihiko AOKI
Die ungeordnete „Aufhebung des Schußbefehls“ in der DDR (03.04.1989): Die SED war schockiert über den Fall „Grenz-übergangsstelle Chausseestraße“ und den Abbau von Grenzsicher-ungsanlagen in Ungarn

No. 4 (Nov. 2018)

Yoji Koyama
Migration from New EU Member States in Central and Eastern Europe and Their Depopulation: Case of Bulgaria

No. 3 (Nov. 2018)

青木國彦
ベルリンの壁最後の射殺ギュフロイ事件（1989 年 2 月）の詳細とその意味：「1988 年 12 月にホーネッカーが射撃命令を制限」（少尉ハンフ法廷証言）の真偽

Kunihiko AOKI
Was war der Fall Chris Gueffroy in der DDR: Eine Über-püfung der Aussage des Unterleutnant Alexander Hanfs „Honecker habe im Dezember 1988 den Schießbefehl eingeschränkt“

No. 2 (Aug. 2018)

青木國彦
CSCE（全欧安保協力会議）ウィーン会議へのホーネッカーとシュタジの対応：東独の新外国旅行政令と「壁は 100 年存続」発言

Kunihiko AOKI
Die Reaktion der DDR-Führung gegen Abschliessendes Dokument des Wiener Treffens der KSZE

No. 1 (May 2018)

青木國彦
元東独政治犯ガルテンシュレーガーの冒険：東独国境自動射撃装置 SM-70 奪取の意味と限界

Kunihiko AOKI
Abenteuer des ehemalige politische Häftlings der DDR Michael Gartenschläger: Warum und wofür montierte er die Selbstschußanlagen SM-70 ab?